特集 「大学入学共通テスト」とこれからの授業

大学入試改革が着々と進み、二〇一七年一一月には、「大学入学共通テスト」（以下、新テスト）の試行調査（以下、プレテスト）が実施され、一二月にはその結果が公表されました。

今号の特集では、高校現場や予備校の先生方による座談会（p.3〜9）と、プレテストの各大問の概要や問題例、教科書を活用した授業の提案（p.10〜32）をお届けします。

このプレテストから、新テストのどのような方向性やねらいが見えるのか。

さまざまな角度から、詳細に迫っていきます。

■試行調査（プレテスト）国語の実施概要
実施期間：一一月一三〜二四日
試験時間：一〇〇分
受検者数：約六万五〇〇〇人（全国・高校二年生以上）

〈座談会〉

新テスト、どう受け止め、どう向き合うか

プレテストの公表を受け、いよいよ具体像が見えてきた「大学入学共通テスト」（新テスト）。

大学入試は、授業はどう変わるのか。

学校現場の先生方四名、代々木ゼミナール教育総合研究所の先生方二名をお招きし、語り合っていただきました。

（聞き手）編集部

安達和貴／佐藤雄太郎／廣瀬充／船口明／古川佳奈／安岡充令（五十音順、敬称略）

プレテスト全体の印象

◆安岡　まず、全体の印象としては、記述式が一問増え、五問構成、時間は二〇分増となっています。分量に関しては、時間との戦いでしょうか。

◆船口　多すぎると思います（笑）。この分量だと第1問を積極的に回避し、記述式で時間を使うよりも、ほかのマークシート式で高得点を取ろうとする受験生が大量発生する気もします。

◆古川　最初の問題から解くと、一〇〇分間集中して解き続ける苦しさがあり、戦術的に順番を変えて解いていくことが考えられますね。

◆船口　記述させたいのであれば、二五分程度で別時間に分けたらよいと思います。

◆安達　受験対象の生徒たちに差をつけると考えたときに、現行のセンター試験だと差がつかなかった層の生徒たちの間で差が出るように、難易度を下げているのかなと感じました。

実用的な文章と記述式　＊第1問

◆安達　第1問は記述式の問題ですが、思考力を問うといいながら、該当箇所を資料から読み取る読解力を問うている気がして、果たしてこの問題から思考力・表現力・判断力がどの程度測れるのか……。

◆廣瀬　テーマによって、生徒の有利不利が出てしまうのではないでしょうか。部活や生徒会活動が盛んな学校であれば身近ですが、そうでない学校の

生徒だと実感をもてずに読んでいくことになるかもしれません。

◆**安岡**　高校生にとって生徒会の規約が実用的かどうかも疑問ですね。最後の資料は学校新聞で、これらを大人の世界に置き換えると、法令やルールと、それを報じるメディア、資料はそれの根拠など論理性を担保するためのデータでしょう。

◆**佐藤**　グラフなどを活用し、そこからヒント・着想を得て解答に導かせるしくみは、新テストのねらいの一つであると思います。

◆**古川**　記述式問題の正答率や、解答のばらつきに注目していきたいです。問題自体がすごく難しいという印象はなく、読むことができれば書けるのかなと思います。

◆**船口**　もともと、大学生に書く力がない、大学で再教育して書くことを教えなければいけないので、高校で書く力をつけてほしいということが、改革のスタートだったと思います。問3の一二〇字で書く設問は、書く前から方向性や書くべきポイントが決まっていて、与えられた条件にもとづいて自分で文章を書く力を問おうとしています。これまでの小論文入試でも、設問の条件が読めていない、聞いていることに答えていない答案がほどんど、という指摘がありました。その意味で「条件にもとづいて書かせる」ことはよいことだと思います。

◆**安達**　慣れていないと戸惑うかもしれませんが、この形の出題が続けば、条件に合わせて解くトレーニングをすればよいという、テクニックが出てきてしまうのではと思いました。

◆**船口**　むしろそれを目指しているのではないでしょうか。論文を書くときに、こんなに形がなく書かせている国は日本だけです。論文を書く入り口として、素材が与えられ、条件が設定され、その条件を読み取れる子どもたちが高校段階で育ってほしいということなのではないでしょうか。

◆**廣瀬**　この試験で測れるのは、今までの大学入試と同様に、情報を抜き出して組み立てるパズルのような読解力・記述力だと思います。本当の表現力や発想力を問うのであれば、もっと長い分量で書かせるしかないでしょう。

◆**佐藤**　例えば、学校で行われている双方向型の学習を記述で表現させたいといったようなねらいがあると思います。ただ、入試問題の形式に慣れていない場合、自らの体験を引き寄せ字数を埋めるなど、感想文のような答案になってしまうといったこともありそうです。また、大学入試は、到達度よりも選抜性に重点が置かれますので、それを考えると、身近な活動が示された問題により活用力を測ることが、どこまで共通テストになじむのか。それを記述式で表現させるところに、どのようなねらいがあるのか。まだまだ検討するところが多いように思われます。

安達和貴
（あだち かずたか）
東京都立武蔵高等学校・附属中学校教諭。

プレテストの内容構成

大問	内容	小問数
第1問	実用的な文章（記述式）	3
第2問	図表や写真が含まれた評論	5
第3問	著名な作品のあらすじ紹介とその翻案から成る小説	5
第4問	三種類のテキストが並置された古文	6
第5問	原文と生徒作品例から成る漢文	7

大学入学共通テスト実施までの予定

◉二〇一七年一一月
試行調査（プレテスト）を実施
正答率等の分析をふまえ問題構成や内容を検討

◉二〇一八年一一月（予定）
大学を会場として試行調査（プレテスト）を実施
二〇一九年度　状況に応じシステム等のための確認テスト

◉二〇二一年一月
新テスト開始

評論を図表と読む　＊第2問

◆**船口**　第2問は評論ですが、問1が「文章全体の内容に照らした場合」で始まっていることに象徴されるように、最初から部分理解でなく全体理解をさせようという意図が感じられます。傍線部を付さずにテクストの全体を理解させる、図表を多用する、問5でテクストの範囲を超えたことを問うことからも、今までと違う形にしようと。

◆**安達**　本文とそこで読み取った内容に加え、緊急時や災害時の対応を考えさせる問5は、本文の該当箇所を探して解くだけでは対応できないようにしたのではという印象をもちました。図表や写真と文章を関連づけ、比較しながら展開をとらえる、そうしたメッセージなんだろうと思います。

◆**古川**　センター試験の対策をしてきた生徒たちでも、図表をうまく見ながら解いていけば、対応しやすい問題、教える側としても解けてほしい問題が多いように思います。

◆**安岡**　この文章に、図も表も要るのかなと思いました。論理的な文章の中で図表は、テクストを補完するものだと思います。図表を参照することでわかりやすくなるように、テクストはもっと難しいものが出てよいし、図表は、もっと理論的なものや哲学的なものでもよい。文章が難しくてわかりづらいから付いているというように、図表の必要性や必然性があるテクストであってほしいですね。

◆**安達**　第2問に限らず、すべての大問に複数の資料を入れることに対しては、まだ議論があるんだろうなと思います。センター試験は、個人的には芸術作品だというくらい出来のよい問題だと思っていて、この問題で問われている力はセンターで十分測れる。あえて変えなくてもよいのではという気はしますが、やりたいことは感じられます。プレテスト自体に、高校の教員側に授業改善、一方的な講義形式でない形に変えていこうよという提案の意味合いもあるのだと思います。

古川佳奈
（ふるかわ かな）
専修大学松戸高等学校教諭。

小説で問う力　＊第3問

◆**廣瀬**　第3問は小説が出題されました。今までの問題が心情理解中心だったとすれば、内容自体を問うものからはずらしたいという設問に見えます。問2は人物造型を本文のいろいろなところを根拠にして理解できているかを問い、問5は構成・表現、「何が語られているか」ではなく「どう語られているか」を理解してほしいという意図で作られているのかなと思いました。

◆**古川**　従来の形式に慣れている生徒に対して、小説にこのような見方を示しているのはおもしろいなと感じます。正答率は低いですが、問4のように原作と創作された文章の関係を問う問題もありました。小説については今後、提示されるテクストが変わるだけで問われていることの軸は変わらないのか、あるいは設問自体にもバリエーションが出てくるのか、向こう十年、どのように展開されていくかが楽しみです。

◆**安達**　原作のあらすじをふまえた上で、創作された小説という二つの内容を比較させることを意識して作っていますよね。問4は、そのあたりに慣れていない生徒が多かったので対応が難しかったのではないでしょうか。

◆**廣瀬**　「何が書いてあるか」ではなく、「どう書いてあるか」ということ、作品同士の重層性を理解させたいのかなと感じます。そもそもセンター試験の小説では、どのような力を問うていたのでしょうか。

◆**船口**　センターの方が、文学に関して総合的な力を問おうとしていた気がします。今回の問題文は、高校生に読ませるものとしては易しい。指導要領に鑑みても、国語を言語能力を身につける科目だと考えると、大学入試では文学が軽視されるのではという危惧があります。センターの小説は、年度にもよりますがよく選択肢が考えられていて、こういう読み違いをするだろうなというものが絶妙に入っています。心情の理解とともに文章を冷静に読ませることを考えると、流れの中で理解させるセンターの心情把握の方が意味があるのではないでしょうか。

船口明
（ふなぐち あきら）
代々木ゼミナール教育総合研究所。

◆**安岡**　小説の解釈の領域だけでなく、批評の領域にもっと触れてもよいのではと思いました。そうなると、批評に耐えうる作品、小説の質が問われてくると思います。

古典の授業が変わる　＊第4問

◆**佐藤**　第4問は古文ですね。新テストから大きく変わることの一つに、国語の成績が現古漢一括で示されることが検討されています。垣根を越えるような学習ができているかどうかを問う意図もあるように思います。

◆**古川**　通常は、古文を理解することそのものにエネルギーを注ぐところが、文章自体は短く易しくなっているように感じました。文章Ⅰ～Ⅲを通じて読みが補完されていくので、古文を読む力がついていればできるところもあり、この問題によって授業のイメージが変わります。古文読解に苦労している生徒たちに対して、文章を比較して的確に理解させ判断させるというように、授業で扱えることが増えるなと。写本の話は、日頃は少し触れる程度でしたが、しっかりと取り上げてみてもよいのかなという期待もあります。ただ、限られた時間の中でどこまでできるかなという疑問は残りますが……。

廣瀬充
（ひろせ みつる）
東京学芸大学附属国際中等教育学校教諭。

◆**安岡**　問題文は「長恨歌」とも関わりの深い部分なので、古文・漢文融合の可能性もあるかもしれません。また、文章Ⅱ、Ⅲの注釈次第で、文章Ⅰで読み間違えたところをフォローできる場合があるのではないかと思います。注など説明が多いので易しくも感じます。

◆**安達**　問題を解くための古典文法や知識は、これまでを上回るものが要求されているわけではないと思います。文章も難しくはないので、注や情報、そもそものシチュエーションを把握して読めれば、そこまで苦労しないのでは。文法や品詞分解とは反対方向に寄せていくのかなと感じました。

◆**廣瀬**　この問題自体が工夫された授業だなという印象です。いろいろな資料を読ませて、何がどう表象されているかは国語で考えるべき問題だと思っています。同じ事象であっても語られ方が変わるということを思考することは、古典に限らずできそうだし、そういう授業をされている先生方はたくさんいらっしゃるのではないかと感じました。この問題文でレポートを書かせたらおもしろいですね。

◆**安岡**　問い自体はセンター試験とそれほど変わらないですね。伝本の違いを扱うのであれば、その違いを読み解けるところまで行ければよいのでしょうが、最後の問いがそれに相当するとは思えません。そこまでしないのであれば、複数資料を使うにしても伝本の違いでなくともよいのではと思います。それについては試行錯誤されていくのかな、と。まだまだこういう資料の使い方があるというストックが、作成者の側にありそうで、私は楽しみです。

素材をいかに使うか　＊第5問

◆**廣瀬**　第5問の漢文もセンター試験とは違うタイプの問題ですが、選択問

安岡充令
（やすおか みつはる）
専修大学附属高等学校教諭。

題であるという制約は免れないですね。手間暇かけて、問うている力は従来と変わらない。第4問もそうですが、これが授業であれば、レポートを書かせて評価をしてみたいです。

◆**安岡**　素材はおもしろいと思いますよ。実際にはほとんど漢文に時間を割かない学校もあり、そこをつなぎ止めるために易しくするという意向で、文章Ⅱにより本文を補足できるような資料を見せる狙いもあるでしょうが、もう少しうまく使ってほしいです。漢文は、テクストを読むことで養い育んできたものがあるわけで、テクストだけで再生する想像力も損なわない形で作問するのはすごく難しいだろうなと思います。

◆**廣瀬**　国語教育において、「教材を教える」のか「教材で教えるのか」という話はずっとあったと思います。今は「教材で教える」、言語能力・コンピテンシー重視の流れですが、「教材・コンテンツを教える」ことが大きな意味をもつ場合もあり、古典文学などは特にそう感じます。スキルをどう身につけさせるかも重要ですが、高校の国語の授業で何をすべきなのか、スキルだけを身につけさせることが果たして成り立つのかはもっと問われて良いと思います。今までも高校の先生方はおもしろい話や豆知識を紹介しながら作品世界の奥行きを伝えようとされてきたと思いますが、むしろそこに本質があるのではないかという気がしています。

◆**安達**　資料を複数使うなら、深めていくために活用したい。資料を見たときの期待感と、問題を見た時のがっかり感の落差があります（笑）。内容を深めるような問題、わくわくするような問題があればよいのにな、と。

これからの国語の授業

佐藤雄太郎
（さとう ゆうたろう）
代々木ゼミナール教育総合研究所。

◆**佐藤**　今回の試行調査は、新傾向の問題を目いっぱい出した形ではないでしょうか。時間的には足りなかったと思いますが、新学習指導要領でやりたいこと、目指すべき授業が、特に素材の部分で意識されているのかなという気がします。

◆**廣瀬**　国語の授業は、結局それほど変わらないのかなと思います（笑）。基本的なスキルを問う試験であることは変わらず、授業も大きくは変わらないかと。

◆**船口**　この試験の良し悪しではなく、この試験を使って目の前の生徒たちがの力がよりつくようにする、そういう道具として使うべきだと思います。これをもとにもっと生徒たちが書けるように、一歩でも二歩でも変わっていく、教える側としてもそういう契機としたいです。

◆**安岡**　この問題の素材の示し方により、やりたい授業に近づく気がしています。新しく生徒たちに提供できる素材や見せ方が増やせる、そうした授業をブラッシュアップするための一つのステップを見せてもらったかなと思っています。新指導要領もそうですが、古典と現代を区切らないことには、国語、文学、文化を流れとして見るという意味で賛成です。素材や見せ方が広がることで、生徒たちの教養や知識が豊かになると思います。それらは試験で測れる部分とそうでない部分があり、測れない部分に関しては提示することで、将来の役に立つかもしれないことや、実用性にとらわれない普遍的な価値を、伝えていきたいです。

◆**古川**　教員にもいろいろな可能性を提示してくれているテストだと思います。新テストに対して批判的な見方もできますが、こちらは来た球を打つしかない。目の前に生徒がいて試験があって、それにどうやって立ち向かわせていくかということを考えなくてはいけません。学校の内外で、立場を越えた意見交流が行われ、多様な考えが混在している今の雰囲気を、私はおもしろいなと感じています。試験もしばらくは手探りで進み、結果を見ながら改善されていくと思いますが、どういう傾向に落ち着いていくのか、今後も楽しみです。

▶ご参加の先生方

◆**安達**　授業を改善していこうと取り組んでいる先生は、この問題を見て勇気をもらうのではないかと思います。今日伺っていても、公立の高校は動きが鈍いなと感じ、危機感を覚えています。国語でどういう力をつけるのか、伸ばすのかということに我々教員が向き合って、どういう教材や学習活動を提示できるのかということを、常に考え改善していかなければならないんだなと強く思いました。

（二〇一八年二月二七日、大修館書店会議室にて）

試行調査（プレテスト）の概要と授業提案

プレテスト各問の概要とポイントをまとめ、それに対応するための授業案をご紹介します。

第1問　実用的な文章（記述式）

ある高校の部活動に関する生徒会規約と、生徒会部活動委員会の執行部会の話し合いの様子（【会話文】）、および執行部会で参照された【資料①〜③】を示し、条件付きの記述式問題に答えさせる設問です。

一二〇字以内という比較的長い文章で答える記述式であることに加え、生徒会規約という実用的な文章や、複数の資料を比較させることなどが、特色となっています。

【会話文】※部分抜粋

永井　【資料①】から考えると、まず取り上げる議題は「部活動の終了時間の延長」ですね。

島崎　そうですね。では、次に重要だと思われる議題は何でしょうか。

寺田　「兼部規定の見直し」です。（略）これまで認められてこなかった［　ア　］という要望です。（略）

寺田　市内五校の部活動の終了時間がどうなっているか、まとめてみました。【資料②】です。

森　別の資料もあります。【資料③】です。（略）

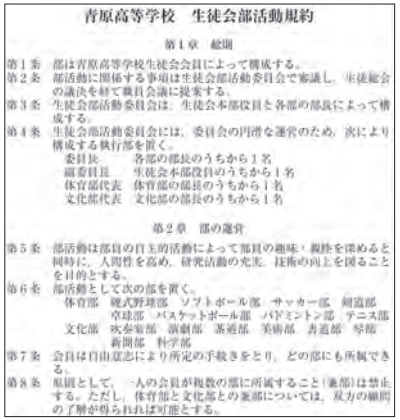
島崎　ありがとう。では、これらの資料を基にして、部活動の終了時間の延長を提案してみましょう。

森　ちょっと待ってください。提案の方向性はいいと思うのですが、課題もあると思います。［　イ　］

※問1、2は省略。

問3　空欄［　イ　］について、ここで森さんは何と述べたと考えられるか。次の(1)〜(4)を満たすように書け。

(1)　二文構成で、八十字以上、百二十字以内で書くこと（句読点を含む）。なお、会話体にしなくてよい。※条件(2)〜(4)、【資料②】は省略。



青原高等学校　生徒会部活動規約

第1章　総則

第1条　部は青原高等学校生徒会会員によって構成する。

第2条　部活動に関係する事項は生徒会部活動委員会で審議し、生徒総会の議決を経て職員会議に提案する。

第3条　生徒会部活動委員会は、生徒会本部役員と各部の部長によって構成する。

第4条　生徒会部活動委員会には、委員会の円滑な運営のため、次により構成する執行部を置く。

委員長　各部の部長のうちから1名
副委員長　生徒会本部役員のうちから1名
体育部代表　体育部の部長のうちから1名
文化部代表　文化部の部長のうちから1名

第2章　部の運営

第5条　部活動は部員の自主的活動によって部員の趣味・興味を深めると同時に、人間性を高め、研究活動の充実、技術の向上を図ることを目的とする。

第6条　部活動として次の部を置く。

体育部　硬式野球部　ソフトボール部　サッカー部　剣道部　卓球部　バスケットボール部　バドミントン部　テニス部
文化部　吹奏楽部　演劇部　茶道部　美術部　書道部　琴部　新聞部　科学部

第7条　会員は自由意志により所定の手続きをとり、どの部にも所属できる。

第8条　原則として、一人の会員が複数の部に所属すること（兼部）は禁止する。ただし、体育部と文化部との兼部については、双方の顧問の了解が得られれば可能とする。

【資料①】

【資料】

青原高校新聞（平成29年9月1日）　文化部部室　各年次等学校新聞掲載　抜粋

青高生の主張

第一位は「部活動の充実」

新聞部・青高アンケート結果発表

「部活動の充実」の内訳

青原高校に求めるもの（複数回答可）

【資料③】

第1問をふまえた学習活動①「実用的な文章」を教室へ

筑波大学附属坂戸高等学校
粟飯原匡伸（あいはらまさのぶ）

■高校生と「実用的な文章」

二〇一八年一月現在、携帯電話キャリアのTVCMで男子高校生が学校の教室で「カタログ」を読み、内容を分析したり、マーカーで印をつけたりするものが放送されていて、話題になっている。主人公の男子高校生は、コミカルに「この一文にどれほどの親心が表現されているか。見事です作者は。」と述べ、その後、自分の意見が偶然三〇字で表現できたことに喜ぶ姿が印象的である。

本校の生徒のスマホ所持率はほぼ100％であり、さまざまな場面で日常的に利用している。内閣府の「平成28年度 青少年のインターネット利用環境実態調査」でも高校生のスマホ利用率は約95％である。ところが、生徒に確認してみると、スマホやアプリなどの利用規約や説明書などを読んだことがある生徒はほとんどいなかった。個別にその理由を聞いてみると、膨大な情報量（文字量）や利用規約特有の言葉（内容）の難解さをあげた。

以前から、大修館書店の「国語総合」では、他の教科書会社に比べ積極的に〈情報〉や〈メディア〉、〈社会〉をテーマにした単元を設定しているので、折に触れ、副次的に、たとえば、スマホの利用規約であったり、本校の生徒会会則であったりを紹介し、そのいくつかの意味を追ったり、解釈をしたりすることをした。しかし、全体的な授業時間数を考えると、やはりそれらはあくまでも語句の意味を考えたり解釈したりする程度が限界であった。そもそも各社の国語の教科書を見ても、「実社会・実生活」をテーマとする評論文はまだまだ少ないと言わざるを得ない。

■プレテストの「実用的な文章」

さて、いま公表されている「大学入学共通テスト試行調査問題」の「第1問（実用的な文章と記述式問題）」を見ると、生徒会部活動規約をテーマに、【会話文】、資料三つ（うち一つはアンケート結果を含む高校新聞記事）を部分的にかつ全体的に把握、精査・解釈して解答することが要求されている。特に、五人の会話文からそれぞれの主張や会話の関係性を読み取ることや、三つの資料を比較しつつ、全体を把握するといった、総合的な国語力が求められている。

【会話文】の特徴として、一つのテーマを五人の人物が議論しつつ、収斂していくタイプのものではなく、本論には関係しない内容を含みつつ、「ダンス部の設立」、「部活動の終了時間の延長」、「兼部規定の見直し」と話題が次々とすり替えられいく形式を持つ。登場人物それぞれの論点と、資料の要旨を結び付けつつ、解答をまとめる作業は、従来型のテクスト精読型の授業を受けてきた、いまの生徒にとってはなかなか難しいかもしれない。

大学入試センターが公表している「問題のねらい、主に問いたい資質・能力及び小問正答率（速報値）等」によれば、「現代の社会生活で必要とされる実用的な文章のう

ち，高校生にとって身近な『生徒会規約（部活動規約）』等を題材としている。それらを踏まえて話し合う言語活動の場を設定し，複数の資料を用いることにより，テクストを場面の中で的確に読み取る力，及び設問中の条件として示された目的等に応じて思考したことを表現する力を問う。」とある。「生徒会規約（部活動規約）」等が多くの高校生にとって身近なものであるかどうかは疑問が残るが、それは自省的に言えば、国語の授業の中で、また生徒指導の場で、丁寧に生徒会規約などを扱う場面があまりないことに起因する。

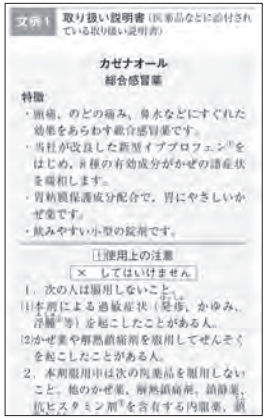
■教科書の評論教材との関連

従来、メディアといったとき、なんとなくの合意として、新聞やニュースなどを意味していたように思う。これまでの枠組みを拡大し、『新編現代文B 改訂版』にあるような、医薬品などに添付されている取扱説明書や通知文、法律の文章などをメディアとして積極的に扱っていき、文体や内容、表現方法について理解させていくことが今後求められている。

同じ教科書のほかのページに目を移せば、北原保雄「言葉は変わるもの、されど伝承すべきもの」の冒頭「最近、『マニュアル言葉』や『バイト敬語』と呼ばれる言葉が」とある。「お名前を頂戴できますか」、「千円からお預かりします」などの典型的な「マニュアル言葉」を普段耳にすることは多いだろうが、「マニュアル言葉」が実際のマニュアルに掲載されているかどうかを気に止める生徒は少ないだろう。バイトをしていない生徒にとってバイト先のマニュアルを読む機会はないし、バイトをしていたとしてもマニュアルを一字一句熟読した上で「マニュアル言葉」を習得することはないように思える。こうした評論文をきっかけにして、さまざまなマニュアルを生徒に探させ、何が書かれているのかを読み解かせたい。

■他教科との連携も視野に

他教科や総合的学習の時間との連携において、国語科が文書理解を担当することも可能であろう。実際、本校の総合的な学習の時間で街頭募金をしたいという生徒に道路使用許可の申請を出させたことがある。その時、生徒とともに警察庁のwebサイトで「道路使用許可の概要、申請手続等」を読んだ。高校生にとって馴染みのない文体に苦労しながらも、警察署の窓口で何回か指摘を受けながらも無事に申請書を提出することができたが、その生徒はその後、他の生徒にも申請書を簡単に出せるようにと高校生版マニュアルを作成し、共有していた。その生徒たちが、『新編現代文B 改訂版』で「社会生活と文章」の法律の文章（道路交通法の条文）を読むとより身近な存在とすることができるだろう。続く学習のポイントでも標識の意味について考えさせる項目がある。教科間連携を前提にした国語科での言語活動は、「実社会・実生活に生きて働く国語の能力を高める」深い学びとなるだろう。


文例1 取り扱い説明書（医薬品などに添付されている取り扱い説明書）

カゼナオール
総合感冒薬

特徴
・頭痛、のどの痛み、鼻水などにすぐれた効果をあらわす総合感冒薬です。
・当社が改良した新型イブプロフェン[1]をはじめ、8種の有効成分がかぜの諸症状を緩和します。
・胃粘膜保護成分配合で、胃にやさしいかぜ薬です。
・飲みやすい小型の錠剤です。

[1]使用上の注意
× してはいけません
1．次の人は服用しないこと。
(1)本剤による過敏症状（発疹、かゆみ、浮腫[2]等）を起こしたことがある人。
(2)かぜ薬や解熱鎮痛剤を服用してぜんそくを起こしたことがある人。
2．本剤服用中は次の医薬品を服用しないこと。他のかぜ薬、解熱鎮痛剤、鎮静薬、抗ヒスタミン剤[3]を含有する内服薬、鎮

▲『新編現代文B 改訂版』p.57

さらに発展させるとすれば、同教科書に掲載されている荻上チキ「メディアって何？」に付随する言語活動「テーマを設定して調べた成果をまとめる」では「インターネットで情報を集める」方法が紹介されている。従来、そこで例示されているような政府・自治体・公共団体のサイトなどを見て、生徒に読ませたり検証させたりする時間はあまりなかった。今後新テストのような実用文を意識するのであれば、たとえば、防災教育の一環として、東日本大震災をテーマに復興庁や福島県が運営する「ふくしま復興ステーション」などのwebサイトを調査し、高校生にもわかるような書き換えを行うことができよう。

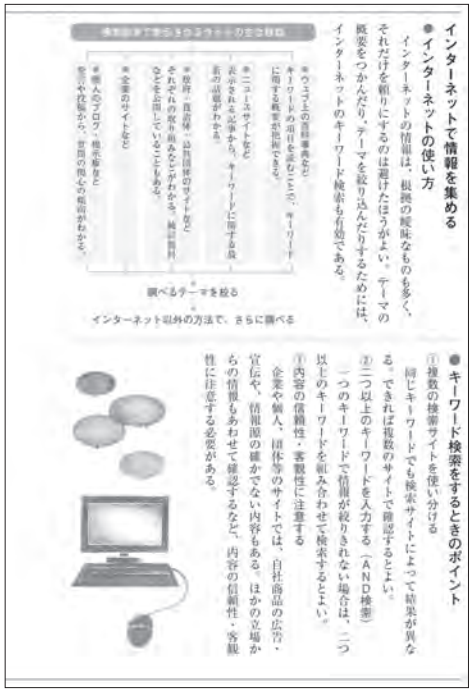
新テストにおいては、様々なメディアに掲載される多様な文体・表現方法を持つ文章の把握と、それに対する意見を的確にまとめる力が求められている。教科書というメディアもまた、言語活動のためにどういった素材を掲載するのかが今後問われてくるはずだ。次のステップとして、多様なテキストが収録されるであろう教科書をどう運用していくかが、今後の国語科教員に求められていく。楽しみに待ちたい。

図 私たちの身のまわりにはたのような道路標識が設置されている。それぞれどのような意味を示したものか、例にならって文章にしてみよう。

[例]

標識の意味　スクールゾーン
説明　この標識が設置された道路は、付近に学校・幼稚園・保育所などがあり、通学・通園のために大勢の生徒・児童・幼児が通行するので、自転車や自動車の運転手は徐行するなどの注意を要する。

▲『新編現代文B 改訂版』p.62


情報を集める

インターネットで情報を集める

●インターネットの使い方

インターネットの情報は、根拠の曖昧なものも多く、それだけを頼りにするのは避けたほうがよい。テーマの概要をつかんだり、テーマを絞り込んだりするためには、インターネットのキーワード検索も有効である。

＊ウェブ上の百科事典などでキーワードの項目を読むことで、キーワードに関する概要が把握できる。
＊ニュースサイトなどで表示される記事から、キーワードに関する最新の話題がわかる。
＊政府・復興庁・福島県のサイトなどでそれぞれの取り組みなどがわかる。統計資料などを活用していることもある。
＊企業のサイトなど
＊個人ブログ・掲示板などを含めた仕組みから、世間の関心の所在がわかる。

調べるテーマを絞る

インターネット以外の方法で、さらに調べる

●キーワード検索をするときのポイント

①複数の検索サイトを使い分ける
同じキーワードでも検索サイトによって結果が異なる。できれば複数のサイトで確認するとよい。
②二つ以上のキーワードを入力する（AND検索）
一つのキーワードで情報が絞りきれない場合は、二つ以上のキーワードを組み合わせて検索するとよい。
③内容の信頼性・客観性に注意する
企業や個人、団体等のサイトでは、自社商品の広告・宣伝や、情報源の確かでない内容もある。ほかの立場からの情報もあわせて確認するなど、内容の信頼性・客観性に注意する必要がある。

▲『新編現代文B 改訂版』p.148

第1問 をふまえた学習活動② 資料をもとに議論する

武蔵野大学
初谷和行（はつがいかずゆき）

■はじめに

大学入学共通テスト（新テスト）の試行調査第1問は、次期教育課程の「現代の国語」の内容を念頭に置いた設問であろう。ここでで求められる力は、以下のようなものである。

・議論の話題に応じてテクスト（問いによっては複数のテクスト）から必要な情報を取りだしまとめる。

・テクストをふまえ、発言内容を推論し、他のテクストを参照しながら発言の具体的内容を検討し、回答の条件に即しながらまとめる。

本稿では、このような問題に対応するための学習について提案する。

■新テストへの対策授業案

●授業準備のポイント

・実用的な文章を取り扱う

・複数の資料を取り扱う

・目的に応じた情報の取り出しを行う

・文脈や目的に応じて考えを表現する

■資料を集め、資料をもとに議論をしよう

●授業の概要

『国語表現　改訂版』「建設的な議論の進め方」を参照し、五名程度のグループで文化祭でのクラス企画について議論し、提案文を作成する。

●授業の展開

①資料の準備

まず、例えば次の方法で、議論の俎上に載せる具体的なクラス企画を出す。

・クラス全体で希望調査を行う（プレテストの資料①のイメージ）

・グループ内でブレーンストーミングを行う（教科書記載の方法）

・企画を挙げることに資する資料を準備する（過去や他校の企画一覧など）

次に、議論するために必要な資料について検討し、準備する。

【準備する資料の例】

・文化祭クラス企画に関する規約・内規

・企画検討の観点一覧

・各企画の長所・短所一覧

・企画に関する生徒や保護者等からの声

②議論

教科書をもとに、議論の進め方等について確認した上で、準備した資料を用いながら文化祭のクラス企画に関する議論を行う。その際、議論を録音・録画すると、事後のふりかえりに役立つであろう。

③提案文の作成

各グループごとに、クラス企画に関する提案文を作成し、発表し合う。

【作成の際の留意点の例】

・結論（提案する企画）を最初に述べる。

・理由と裏付けを提案文に入れる。

・他の企画に関しても言及する。

④振り返り

【振り返りの観点の例】

・資料について

・多角的に検討できる資料だったか。

・不足または余分な資料はあったか。

・議論について

・資料を十分に用いた議論だったか。

・検討が十分になされたか。

・多角的な視点で十分な検討だったか。

・議論を反映した結論を導けたか。

振り返りの際には、議論内容や資料内容と具体的に関連付け言語化することが肝要である。なお、正式なクラス企画の決定は引き続き授業で続けても、ＬＨＲで引き取ってもよいだろう。

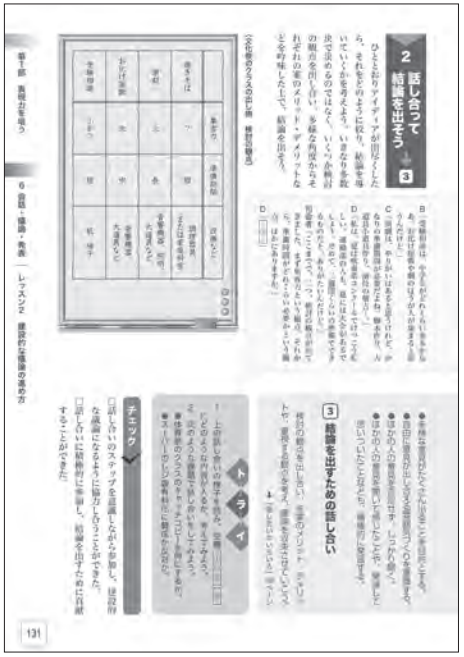
■補足

なお、プレテスト第1問の問題をベースにするならば、プレテストにある問題の他に、例えば次のような問いを立てることも可能であろう。

・**問** それぞれの資料は、議論においてどのように用いられたか、説明しなさい。

・**問**【資料②】、【資料③】を準備した人は、何に対してどのような考えを持っている人だと推測できるか。また、この人の考えに反対したいとき、どのような資料を準備することが効果的か。それぞれ答えなさい。

・**問** この話し合いにおける問題点は何か。指摘しなさい。（解答例：部活動の延長については生徒会規約の改正という方向で進みかけているが、ダンス部の設立に関しては、規約により認められないという結論ありきで、そもそも規約自体を改正するという可能性について議論していない。）



▲『国語表現 改訂版』p.130-131

第2問　評論（図表や写真を含む文章）

日本の路地に関する考察をまとめた文章（評論文）を読んで、問いに答えるものです。問題用紙の上部に、本文の内容を整理した表や、説明のための図、本文に対応した写真が置かれています。

表や図版と本文と合わせて参照させる点に特色があります。また、問1で本文全体の内容を対象としていたり、問5で本文をふまえつつそこから推察される意見を選ぶ設問になっていたりするのも、特徴的です。

【問題文】

次の文章と図表は、宇杉和夫「路地がまちの記憶をつなぐ」の一部である。これを読んで、後の問い（問1～5）に答えよ。なお、表1、2及び図3については、文章中に「（表1）」などの記載はない。

※問題文、問1～4は省略。

問5　まちづくりにおける「路地的空間」の長所と短所について、緊急時や災害時の対応の観点を加えて議論した場合、文章全体を踏まえて成り立つ意見はどれか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

※選択肢①は省略。

②　日本の路地的空間は欧米の路地とは異なり、自然との共生や人間同士のふれあいを可能にするという長所がある。一方、自然破壊につながるような区画整理を拒否するため、居住空間と通行空間が連続的に広がらず、高齢の単身居住者が多くなり、災害時や緊急時において孤立してしまうという短所がある。

③　豊かな自然や懐かしい風景が残存している路地的空間は、持続的に住みたいと思わせる生活空間であり、相互扶助のコミュニティが形成されやすいという長所がある。一方、計画的な区画整理がなされていないために、災害時には、緊急車両の進入を妨げたり住民の避難を困難にしたりする短所がある。

※選択肢④は省略。

⑤　再開発を行わず近代以前の地域の原風景をとどめる低層住宅の路地的空間は、コミュニティとしての結束力が強く、非常事態においても対処できる長所がある。一方、隣接する欧米近代志向の開放高層居住空間のコミュニティとは、価値観があまりにも異なるために共存できないという短所がある。

【正解】③《正答率44・3％》

【第2問】

第2問をふまえた学習活動
図表と関連づけて読む

文教大学
山下直（やましたなおし）

第2問は、本文上段に二つの表と五つの図が示されています。この問題のポイントは、本文の内容と表や図を関連づけて読むということです。したがって、授業でも表や図と本文を関連づけて捉えるような読み方を実践することが大切です。ここでは、そのような読み方を実践するための教師の心構えと教科書教材の活用の仕方について述べていきます。

■傍線部がある試験とない試験

これまでの入試センター試験の国語科の問題は、本文の一部に傍線が付され、その部分について問いが示されるという形がほとんどでした。高等学校の定期考査の問題も、多くはこの形になっていると思います。例えば、第2問の本文第二段落冒頭の一文「西欧の路地にはない自然性」に傍線を付し、「具体的にどのようなことか本文中から二つ抜き出しなさい」という問いを作って「物質としての自然」「形成過程としての自然」を答えさせるといったような感じです。

ところが、第2問には本文のどこにも傍線が付されていません。

傍線部のある試験とない試験では何が違うのでしょうか。傍線部のある試験では、受験者にとって問われている部分が明確なため、本文のどこに着眼すべきかを考える負担が少なくて済みます。一方、傍線部のない試験では、その問いに答えるために本文のどの部分に着眼すべきかを考える必要があります。

このことは、問いに答えるためのプロセスに違いがあることを意味しています。そして、この違いは「読むこと」の学習指導のあり方にも大きく関わってくるのです。

■「読むこと」のヴァリエーション

国語科の試験の多くが傍線部のあるものとなっているのは、学習指導のあり方から考えればむしろ自然なことといえます。「読むこと」の学習では、本文に述べられていることを正確に理解するために、指示語の内容を把握させたり、問題提起に対する答えを探させたり、抽象的な言い方になっている部分を具体的に説明させたりすることなどが多く行われているからです。このような学習指導を行っていれば、そこで身につけた能力を問うためには、指示語に傍線を付して指示内容を正しく把握しているかを問うたり、問題提起の部分に傍線を付してそれに対する答えを見つけさせたり、抽象的な述べ方をされている部分に傍線を付してその内容を説明させたりすることなどが必要となるのは当然です。しかも、これが国語科の学習指導として何か問題があるかといえばそんなことはありません。

重要なことは、右のような学習指導のあり方が唯一のものではないということです。本文の内容を正確に把握することは大変重要なことです。ただ、そのような読み方は言うなれば論文を正確に読み取るような読み方です。

しかしながら、私たちが実社会で文章を

読む場合、いつでも一字一句を正確に読むことを最優先にしているわけではありません。例えば、今回の第2問のような文章は新書などにもよく見られるようなものでしょう。私たちが実社会で新書を読むときのことを思い浮かべてみてください。一字一句正確に読むことを目指しているというより、その本に述べられている主旨を誤りなくつかめれば十分と考えているはずです。

第2問はこのような読み方を想定して作成されているのではないでしょうか。表や図と関連づけながら、全体の大まかな構成を捉えることで、本文の主旨を誤りなくつかめているかどうかを問うているのです。

■表や図と関連づける

では、表や図と関連づけながら誤りなく本文の主旨をつかむことをねらいとする学習指導とは具体的にどのようなものなのでしょうか。ここでは、『精選国語総合 新訂版』に採録されている「まずは形から」を例に考えてみましょう。

これまでの国語科の授業では全文を通して一読した後、本文の始めから丁寧に読み直していくという方法がとられていたと思います。「まずは形から」でいえば、まず「笑顔を積極的に利用すること」が「よりよい生き方に繋が」るという本文の内容を押さえた後に、「笑顔の特徴」としてどのようなことが挙げられているかを確認し、「笑顔がコミュニケーションにおける最大の武器」であるという筆者の考えを押さえていくといった進め方です。

国語科の指導においては、このような進め方が典型であり、掲載されているイラストと本文の内容を関連づけてみることは、「読むこと」の学習としてあまり想定されてこなかったように思われます。

さて、この教材には右ページに示したような女性が棒を口にくわえているイラストが示されています。一つは棒を横にしてくわえ、もう一つは縦にしてくわえています。向かって右の口角を上げているイラストは、強制的に笑顔と同じ表情を作っており、左の口角を下げているイラストはそれとは逆の表情を作っています。

このイラストを活用してみましょう。例えば、このイラストが本文のどの部分の内容に該当するか生徒に考えさせてみてください。幸い本文中に、「イラストを見てください」と書かれているので、多くの生徒が該当する部分を容易に指摘することができるでしょう。

次に、その部分が「楽しいから笑顔を作る」のではなく「笑顔を作ると楽しくなる」という逆因果が私たちの脳にはあること」を導いたミュンテ博士の研究の成果について説明するためのものであることを確認していきます。

■「探させる」から「考えさせる」へ

ここまでの流れは、これまでの国語科の読み取りの学習とさほど変わったものではありません。ただ、ここで大切なことは、単に研究からわかったことが本文のどこに述べられているかを探させるだけでは、【思考力・判断力・表現力等】を十分に身につけさせることが難しいということです。例えば、教師が「ミュンテ博士の研究からどんなことがわかりましたか」と尋ね、生徒が本文から抜き出して「楽しいから笑顔を作るというより、笑顔を作ると楽しくなるという逆因果が、私たちの脳にあることがわかります」と答える。もちろん、これでも生徒が本文の内容を読み取れていることになりますが、【思考力・判断力・表現力等】をしっかりと身につけさせるためには、イラストと結論の関係をしっかりと説明させることが重要です。

生徒がミュンテ博士の研究からわかったことを正しく指摘できたら、教師はこんなふうに尋ねてほしいのです。「この二つのイラストは、笑顔を作ると楽しくなるという逆因果が私たちの脳にあることがわかることと、どのように関わっていますか」

この発問に答えるためには、ミュンテ博士の研究の前提や、結論にたどり着くまでの過程を整理することが必要になります。

まず、このイラストが笑顔に似た表情や沈鬱な表情を強制的に作らせるために行われたものであることを押さえます。

では、なぜこのようなことをする必要があったのでしょう。それは「楽しいから笑顔になる」「悲しいから沈鬱な表情になる」という私たちが当たり前と思っていることを検証しようと考えたからです。

3 評論（一） 64

とが、もっとも確実な方法だとわかったのです。

「怒れる拳、笑顔に当たらず」という諺（ことわざ）があります。怒って拳を振り上げても、相手が笑っていると殴ることができない、という意味です。これこそが笑顔の魔力。笑顔は*コミュニケーションにおける最強の武器なのです。

ところが、研究が進むと、笑顔はそれを見る人だけでなく、笑顔を作る人にとっても、[3]よい心理効果があることが明らかになってきました。

まず、ドイツの[2]ミュンテ博士らの研究を紹介しましょう。イラストを見てください。女性が棒を口にくわえています。右図は横にして歯で噛んでいます。左図は縦にして唇で挟んでいます。棒を横にくわえると、[3]表情筋の使い方が笑顔に似た状態になります。決して笑っているわけではありません。強制的に笑顔に似た表情になるのです。一方、縦にくわえると、沈鬱な表情になります。

ミュンテ博士らは、笑顔に似た表情を作ると、[4]ドーパミ

▲『精選国語総合 新訂版』p.64

その結果、笑顔に似た表情を作るとドーパミン系の神経活動が変化することを見出し、「笑顔を作ると楽しくなる」という逆因果が導かれたわけです。

このような整理をすることは生徒にとっては面倒に感じられることでしょう。教師としても、ミュンテ博士の研究から笑顔を作ると楽しくなるという逆因果が導かれたことを生徒が理解していれば、それで十分と感じてしまうのではないでしょうか。これまでの国語科の学習が書き手の主張を正確に読み取ることに重点を置いてきたことを考えると、そう感じてしまうのも仕方がないことなのかもしれません。

しかしながら、これからの国語科では実社会に役立つ能力、理解するだけではなく表現していく能力の育成が求められます。そのためには、結論がどのような過程で導かれるのかを、自分の言葉で整理して捉えることが必要となってきます。

そのような力を育成する上で、表や図と関連づけながら本文の内容を捉えていく学習は大変有効なものとなることが期待できます。生徒にとってミュンテ博士の研究からわかったことを本文から抜き出すことは比較的容易にできても、なぜその研究がなされたのか、どのような過程を経て結論に到達したのかなどを説明することはそれほど容易ではないはずです。しかしながら、イラストとの関連で考えさせれば、教師の発問もシンプルにすることができるし、生徒も何を考えればよいのかを捉えやすくなります。すぐに答えが出てこなくても、イラストとの関わりをいろいろな角度から考えさせることで少しずつ整理していくことが可能でしょう。

■グラフは「読み取る」だけではない

さて、ここまでイラストと本文を関連させる場合について述べてきましたが、グラフや表についても考えてみましょう。『精選現代文B 新訂版』『現代文B 改訂版上巻』の「コミュニティから見た日本」は、本文と連動して、左ページのようなグラフが掲載されています。

このグラフは、先進諸国の中で日本が最も「社会的孤立度」が高い国であることを示しています。これまでグラフは、このようなことを確認する補助的な資料として扱われる程度だったのではないでしょうか。

ですが、例えばここで教師が生徒に対して「なぜ筆者はこのグラフを示したのか」と尋ねてみてほしいのです。文章の書き手は、読み手の納得や共感を得るためにさまざまな工夫をしますが、表やグラフを提示することもその一つにほかなりません。ということは、このグラフを提示することにも筆者の何らかの意図があるはずです。

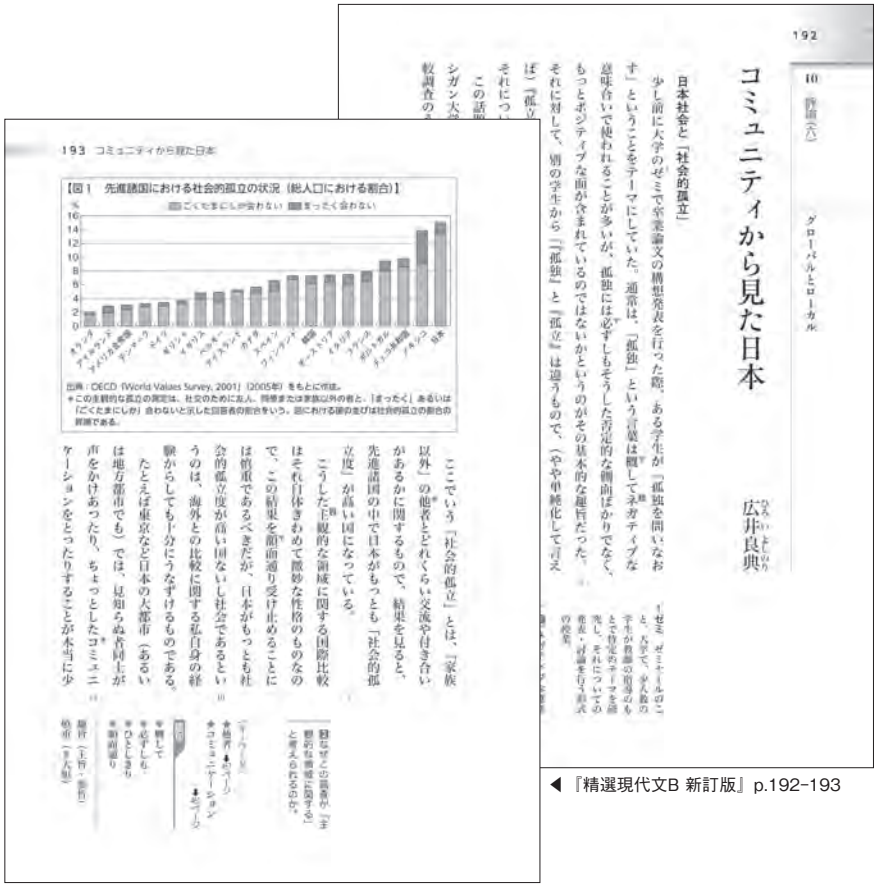
この部分は、特にグラフを示さずに、日本が先進国の中で最も社会的孤立度が高いということを言葉だけで説明してもよいように思われます。けれども筆者はそうはせずに、グラフを提示しました。それはどのような意図に基づく判断なのでしょう。

もちろん、表やグラフを示す第一の理由は、具体的な数値を示すことで自分の主張の確かさを裏づけ、説得力を強めることにあります。ですが、その場合でも単に数値を読み取るだけでなく、そのグラフが示されることでどのような確かさが裏づけられたのかを確認することが必要です。

また、筆者は「家族主義的な傾向の強い国のほうが、概して社会的孤立度が高い」という逆説的な事実を指摘しています。けれども、多くの読み手は日本が社会的孤立度の高い国だとは思っていないでしょう。だからこそ、具体的な数値を示すことで、その事実を鮮明に読み手に伝えようとしているのではないでしょうか。なぜなら、この事実を読み手に受け入れてもらうことは、筆者の主張を納得してもらうために大変重要なことだからです。

このように、表やグラフが示された意図を考えることは、筆者の主張のポイントに迫ることにもつながるといえます。

これからの国語科では正確に読むことに加えて、さまざまな読み方を通して【思考力・判断力・表現力等】を育成することが求められています。これまでの常識にとらわれることなく、柔軟な発想でいろいろと工夫してみてください。



◀『精選現代文B 新訂版』p.192-193

第3問 小説（著名な作品の翻案）

オスカー・ワイルド「幸福な王子」をふまえて創られた小説を読んで、問いに答えるものです。

本文に即して登場人物の心情や言動の意味をとらえるなど、テクストを的確に読み取る力が問われています。それに加えて、原作とその翻案作品（パロディー）を比較し、両者の関係性を把握する力や、パロディーの構成や表現の工夫を読み取る力を問うている点に特色があります。

【問題文】

次の文章は、複数の作家による『捨てる』という題の作品集に収録されている光原百合の小説「ツバメたち」の全文である。この文章を読んで、後の問い（問1～5）に答えよ。

※問題文、問1～3、5、6は省略。

問4　この小説は、オスカー・ワイルド「幸福な王子」のあらすじの記載から始まっている。この箇所（X）とその後の文章（Y）との関係はどのようなものか。その説明として適当なものを、次の1～6のうちから二つ選べ。

① Xでは、神の視点から「一羽のツバメ」と「王子」の自己犠牲的な行為が語られ、最後には救済が与えられることで普遍的な博愛の物語になっている。ツバメたちの視点から語り直すYは、Xに見られる神の存在を否定した上で、「彼」と「王子」のすれ違いを強調し、それによってもたらされた悲劇へと読み替えている。

② Xの「王子」と「一羽のツバメ」の自己犠牲は、人々からは認められなかったものの、最終的には神によってその崇高さを保証される。Yでも、献身的な「王子」に「彼」が命を捨てて仕えただろうことが暗示されるが、その理由はいずれも、「あたし」によって、個人的な願望に基づくものへと読み替えられている。

③ Yでは「あたし」という感情的な女性のツバメの視点を通して、理性的な「彼」を批判し、超越的な神の視点も破棄している。こうして、「一羽のツバメ」と「王子」の英雄的な自己犠牲が神によって救済されるというXの幸福な結末を、「あたし」の介入によって、救いのない悲惨な結末へと読み替えている。

※選択肢④は省略。

⑤ Xは、愚かな人間たちによって捨てられた「一羽のツバメ」の死骸と「王子」の心臓が、天使によって天国に迎えられるという逆転劇の構造を持っている。その構造は、Yにおいて、仲間によって見捨てられた「彼」の死が「あたし」によって「王子」のための自己犠牲として救済されるという、別の逆転劇に読み替えられている。

⑥ Xでは、貧しい人々に分け与えるために宝石や金箔を外すという「王子」の自己犠牲的な行為は、「一羽のツバメ」の献身とともに賞賛されている。それに対して、Yでは、「王子」が命を捧げるように「彼」に求めつつ、自らは社会的な役割から逃れたいと望んでいるとして、捨てるという行為の意味が読み替えられている。

【正解】②、⑥（過不足なくマークしている場合に正解）《正答率18・6％》

第3問をふまえた学習活動
読み比べで多様な視点を

麗澤大学・中学高等学校
髙草真知子（たかくさまちこ）

■「幸福な王子」をもとにした創作

新テストの第3問は、光原百合の小説「ツバメたち」の全文です。この作品は、オスカー・ワイルド作「幸福な王子」のあらすじの記載から始まり、「風変わりな若者」と「あたし」（ともにツバメ）とのやり取りが描かれています。

皆さんは「幸福な王子」をご存じでしょうか。町の貧しい人々の暮らしぶりをツバメから聞いて心を痛めた王子の像が、自分の体から宝石や金箔を外して配るようツバメに頼んだため、冬が来てもその町にとどまっていたツバメはついに凍え死んでしまうというお話です。その後、金箔をはがされてみすぼらしい姿になった王子の像は溶かされますが、心臓だけはどうしても溶けず、王子の心臓とツバメの死骸はゴミ捨て場に捨てられてしまいます。その夜、「もっとも尊いものを二つ持ってきなさい」と神に命じられた天使が、ツバメと王子の心臓を天国に持ち帰るのです。

この物語は、王子とツバメの自己犠牲の精神が、最終的に神によって認められたということをテーマにしています。しかし、引用後の文章では、王子と若いツバメの行為を理解できない「あたし」が、王子は「自分がまとっていた重いもの」（金箔や宝石＝社会的な役割）を捨てたかっただけで、自分のために命を捧げてくれるものを求めていたにすぎないのではないかと考えます。つまり、崇高な自己犠牲ではなく、個人的な願望のための行為だと読み替えられているのです。

■テーマの違いを読み取る

今回の新テストは、古文も漢文も、複数の資料から内容を読み解くことを特徴としています。小説は、完結した一篇の作品でしたが、もとになる物語（X）とその後の文章（Y）との関係を比べ、テーマの違いを読み取る力が必要です。とくに問4は、「XとYとの関係はどのようなものか。その説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。」となっていて、XとYのテーマの違いを正確に理解していないと選べない問題です。

そのほかは、漢字や心情理解、構成・表現に関する問題で、従来のセンター試験対策をしていれば何とかやり過ごせますが、問4には狼狽する生徒も多いのではないでしょうか。

■教科書を使って新テスト対策を！

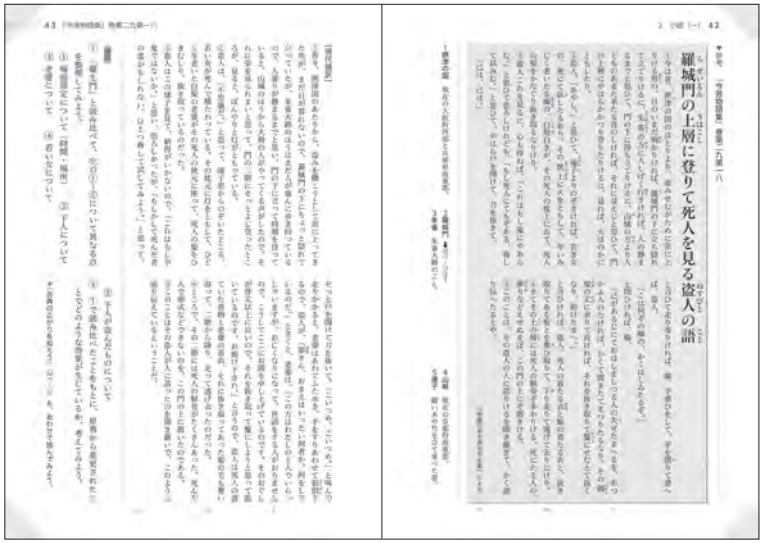
では、このような新傾向の問題に対して、どのような対策をとればいいのでしょう。

1 「羅生門」と「羅城門の上層に登りて死人を見る盗人」（『今昔物語集』巻二九第一八）を読み比べる。

ご存じの通り、「羅生門」は『今昔物語集』を原典としています。『精選国語総合 新訂版』『新編国語総合 改訂版』には、「羅生門」の後に『今昔物語集』の原文と現代語訳を載せ、「『羅生門』と読み比べて異なる点を整理し、原典から変更されたことでどのような効果が生じているか、考えてみよう」という課題を設けています。二つを

読み比べて見えてくる最も大きな相違点は、主人公の人物像です。『今昔物語集』では、最初から盗人という設定でしたが、「羅生門」では、一人の男がいかにして盗人になっていくかという内面のドラマが扱われ、下人の心の推移に力点が置かれています。

さらに、「古典の広がりを知ろう」というコラム（『精選国総』）もあり、芥川龍之介と日本の説話文学との関係を解説しています。「鼻」、「芋粥」、「地獄変」などの名作を、原典となった説話と読み比べると、新テスト対策になると同時に、作家の個性や独自性まで見えてくるのではないでしょうか。



▲『精選国語総合 新訂版』p.42-43

▲『精選国語総合 新訂版』p.264-265

❷「山月記」と「人虎伝」（李景亮）を読み比べる。

「山月記」は、中国・唐代に書かれた伝奇小説「人虎伝」がもとになっています。人が虎に変身するという設定は同じですが、「人虎伝」では、李徵がある女性との恋路を邪魔されたことに腹を立て、その家に火を放って一家数人を焼き殺したことが祟って虎になったと述懐しています。いわゆる因果応報の物語です。

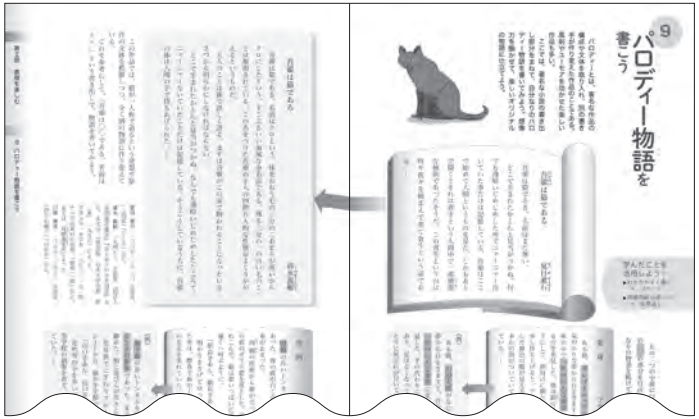
数年前、漢文の時間に「人虎伝」を読んでいたら、生徒が「これ、人が虎になる話でしょう。去年、現代文で読みました。また読むんですか」と文句を言いましたが、虎になった理由の場面になると、「なんかドロドロのサスペンス劇場みたい。『山月記』と全然違いますね」と驚いていました。やはり「山月記」とセットで読むほうが、それぞれの持ち味がよくわかり効果的です。

『精選現代文B 新訂版』には、「山月記」の後に「作品のモチーフ」というコラムがあり、「『山月記』と『人虎伝』を読み比べ、気づいたことを発表してみよう」という課題が設けられています。また、『古典B 改訂版 漢文編』『精選古典B 改訂版』には「人虎伝」が収録され、「漢文の窓」で「人虎伝」と「山月記」との関係をわかりやすく解説しています。「山月記」を読む時は、ぜひこれらのコラムにも目を通して下さい。作者が原典をもとにどのような創作をしているかに注目すれば、読みが深まるだけでなく、一つだけを見ていたときには考えもしなかった観点が生まれ、視野が広がるでしょう。

❸「パロディー物語を書こう」を参考に物語を創作する。

『国語表現 改訂版』には「パロディー物語を書こう」というページがあり、「吾輩は猫である」、「変身」、「雪国」の書き出し部分をまねて、自分なりの物語を書く例が掲載されています。小説を読むだけでなく、自分でも書いてみようという発想です。自分で書くとなると、もとの作品の何を生かし、何を変えるか、テーマはどうするかというアイディアが必要で、柔軟な思考を養うきっかけにもなります。

以上のように、教科書の設問やコラム、言語活動をこれまで以上に積極的に活用すれば、新傾向の問題にも十分対応できると確信しています。



▲『国語表現 改訂版』p.170-171

第4問　古文（三種類のテキスト）

『源氏物語』の「桐壺」の一節について、二種類の本文と、その成立に関する文章という、三つの古文資料を示し、問いを立てたものです。古文も、複数の文章を比較して答えさせる問題となっています。

【問題文】

『源氏物語』は書き写す人の考え方によって本文に違いが生じ、その結果、本によって表現が異なっている。次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は、ともに『源氏物語』（桐壺の巻）の一節で、最愛の后である桐壺の更衣を失った帝のもとに、更衣の母から故人の形見の品々が届けられた場面である。【文章Ⅰ】は藤原定家が整えた本文に基づき、【文章Ⅱ】は源光行・親行親子が整えた本文に基づいている。また、【文章Ⅲ】は源親行によって書かれた『原中最秘抄』の一節で、【文章Ⅱ】のように本文を整えたときの逸話を記している。【文章Ⅰ】～【文章Ⅲ】を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。

※文章Ⅰ～Ⅲ、問1～4は省略。

問5　【文章Ⅱ】の二重傍線部「唐めいたりけむ～思し出づるに」では、楊貴妃と更衣のことが、【文章Ⅰ】よりも詳しく描かれている。この部分の表現とその効果についての説明として、適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 「唐めいたりけむ」の「けむ」は、「長恨歌」中の人物であった楊貴妃と、更衣との対比を明確にしている。

② 「けうらにこそはありけめ」という表現は、中国的な美人であった楊貴妃のイメージを鮮明にしている。

③ 「女郎花」が風になびいているという表現は、更衣が幸薄く薄命な女性であったことを暗示している。

④ 「撫子」が露に濡れているという表現は、若くして亡くなってしまった更衣の可憐さを引き立てている。

※選択肢⑤は省略。

問6　【文章Ⅲ】の内容についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 親行は、女郎花と撫子が秋の景物であるのに対して、柳は春の景物であり、桐壺の巻の場面である秋の季節に使う表現としてはふさわしくないと判断した。そこで、【文章Ⅱ】では「末央の柳」を削除した。

② 俊成の女は、「末央の柳」は紫式部の表現意図を無視した後代の書き込みであると主張した。そして、俊成から譲られた行成自筆本の該当部分を墨で塗りつぶし、それを親行に見せた。

③ 光行は、俊成所持の『源氏物語』では、「未央の柳」が見せ消ちになっていることに不審を抱いて、親行に命じて質問させた。それは、光行は、整った対句になっているほうがよいと考えたからであった。

④ 親行は、「未央の柳」を見せ消ちとした理由を俊成に尋ねたところ、満足な答えが得られず、光行からも若菜の巻を読むように叱られた。そこで、自身で若菜の巻を読み、「未央の柳」を不要だと判断した。

※選択肢⑤は省略。

【正解】

問5③《正答率22・9％》

問6③《正答率28・9％》

第4問をふまえた学習活動

読み比べで広げる古文の授業

岡山県立林野高等学校
内田浩文

プレテストでは、実用的な文章による記述問題、図表・写真・複数テクストの使用、「正しいものをすべて選べ」といった、出題形式の変更について注目が集まっているようである。しかし、私たち高校現場に立つ者が気にしなければならないことは、出題形式がどうであるか、どのようなトレーニングをしなければならないのか、といった、言わば実務的な部分ではないのだろう、と思う。重要な一節は、文部科学省「大学入学共通テスト実施方針策定に当たっての考え方」に示された、次の部分である。「記述式問題を導入し、より多くの受験者に課すことで、高等学校に対し、『主体的・対話的で深い学び』に向けた授業改善を促していく大きなメッセージになる。」

今回の高大接続改革が目指しているところは「授業」なのである。だから、「新テストになっても高校の授業が大きく変わることはない」という反応には、一抹の危惧を覚える。現在、主体的な学びを引き出すような授業が構築できているのなら、大きく変えることはない。しかし、そうでないのなら、我々の授業を変える「覚悟」が必要なのではないか。

もちろん、こうした動きに対して、現場に立つ者が不安を感じることは、ある意味では当然だとも思う。私たちの前には生徒がいて、授業の一瞬一瞬が「やり直しのきかない」時間である。しかもこの改革は、ほとんどの部分で私たちにとって「未知の領域」に属している。どのように授業を設計していけばよいのか…。「Chalk & Talk」ではない形の、有効な授業サンプルは、高校の授業の中ではまだまだ不足している。

私たちが試みなければならないのは、実践を共有し、積み重ねていくことなのではないか。急激な、根本からの授業変革を求めるのではなく、「変わろうとする意欲」と「変えようとする覚悟」を持って、まずは「少しだけ」授業を変えることだ。

前置きがすっかり長くなってしまったが、プレテスト第4問は、『源氏物語』からの出題である。やはりここでも、複数の文章が提示され、それを読み比べながら問いに答えるものになっている。今後の授業の中でも、こうした展開は増えてくると思われるが、これはあくまでも「手段」なのである。何のために読み比べるのか、そのことでどのような「資質・能力」を養おうとするのか、それを忘れないようにしたい。そこで、私の実践を、簡単に事例として書き留めておきたいと思う。

1 『枕草子』「中納言参り給ひて」と『紫式部日記』和泉式部と清少納言」を読んだ後の活動

これは、『古典B改訂版　古文編』にも載っている教材である。この単元の目標は、指導要領の『古典B』(1)指導事項ウ「古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること」に置いた。

『紫式部日記』を読み終えた後の生徒たち

は、「式部は清少納言が嫌いだったんだな」という感想は持つ。日本史選択者は、中宮定子と彰子の関係を思い出して、もう少し納得した顔をしている。そこで、この時代の年表を配布して、「諸説はあるけれど、清少納言と紫式部は、同時期に宮中で過ごしたことはないと考えられている」と補足すると、何人かが怪訝な顔をした。

「え、じゃあ、会ったこともない人に、こんなに悪口言ってるんですか？」

そして、『枕草子』「第一段」と『古今和歌集』から春の歌を数首、さらに『源氏物語』の冒頭部分を資料として配付し、枕草子と源氏物語を音読して、印象の違いを尋ねてみた。

「枕は歯切れがいいというか、きっぱりしてる？」

「源氏は、文が途切れなく続く感じ。」

この辺りで、「紫式部も漢文が得意だったわけだから、そうしてみると、『清少納言は大したことないのに調子に乗ってる』と思ったんじゃないか？」というつぶやきも出てきたので、拾い上げて書き留めさせておいた。続けて、古今和歌集に注目させる。時代的には枕や源氏より前だ、ということを補足しておいて、「春はあけぼの」以下との印象の違いをまとめさせた。

「清少納言って、色彩感覚がすごい」

「春の夜明けの美しさって、古今和歌集には出てこないの？」

こうしたつぶやきが広がった頃合いに、「会ったことがないにもかかわらず、なぜ紫式部は清少納言を『したり顔にいみじうはべりける人』とまで言うのか？」という問いを示して、数人を指名して板書とその相互評価を試みさせた。この時、誰と相談してもいいし、一人で考えてもかまわないと指示している。また、いわゆる「正答」は示さなかった。

授業後、参観して下さった先生方から、「生徒に提示した教材が、あまりにも誘導的ではないか」という指摘を頂いた。ただ、生徒たちはこの授業を通じて、千年も前に生きていた女性たちの息づかいを感じ、彼女たちが考えたことを文字を頼りに辿ろうとしていた。とすれば、指導要領の目標はある程度実現できたのではないか、とは思っている。

この実践では、複数の古文教材を読み比べていったわけだが、こうした複数の「テクスト」の間にもっと段差があれば、より豊かな「ものの見方、感じ方、考え方」が実現できるかもしれない。例えば、次のような活動の展開もある。

2 『今昔物語集』「安倍晴明と百鬼夜行」原文、小説、漫画の読み比べ

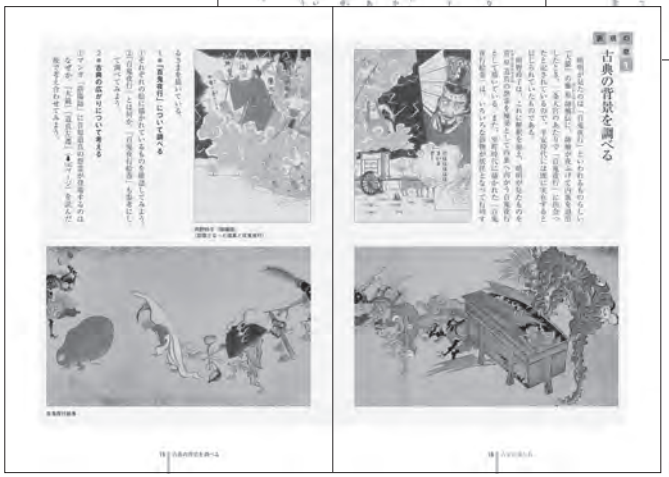
同じく『新編 古典B 改訂版』所収の、『今昔物語集』「安倍晴明と百鬼夜行」では、今昔物語集の原文と、同じ場面を描いた小説、そして漫画の、三種類のテクストが示されている。

一見してわかるように、「情報量」は漫画が最も多い。次いで小説、原文となる。この素材に限らず、「現代語訳すると分量が増える」ことは、生徒も実感として理解していると思う。では、なぜそうなるのだろうか。古文は省略が多い、と言われるが、なぜ省略することができたのだろうか。

これらの問いの先に現れてくるものは、現代に生きる私たちが失ってしまった「闇の深さ」と、その前で立ちすくみつつも、闇の中にうごめくものに対して、古人びとが懸命に巡らそうとした「想像のまなざし」なのではないかと思う。「えもいはず怖ろしき鬼ども」は、形を持たないから怖ろしいのである。それを見た晴明、忠行の素早い対応のありさまは、簡潔に示されているからこそ、読み手（聞き手）の中で自在に動くことが可能なのである。それは、資料として付されている『百鬼夜行絵巻』の鬼たち…付喪神という性格まで付され、正体が露わになった結果、怖ろしさが薄らいでいった鬼たち…の姿からも感じられる。そして、この「省略」に目を向ければ、「古文を古文として読むこと」の重要性もまた、実感できるのではないか、とも思う。

▲『新編古典B 改訂版』p.17

『新編古典B 改訂版』p.14-15 ▶



◀『新編古典B 改訂版』p.18-19

第5問　漢文（原文と生徒作品例）

司馬遷『史記』より、周の西伯が呂尚（太公望）と出会った時の話を記した漢文の原文【文章Ⅰ】と、太公望のことを詠んだ佐藤一斎の漢詩について生徒が調べてまとめた作品例【文章Ⅱ】を提示し、問いを立てています。複数の資料の読み比べ、また、その一つが生徒作品例であることが特徴です。

【問題文】

※文章Ⅰ、問1〜5は省略。

問6　【文章Ⅱ】の□で囲まれた〈コラム〉の文中に一箇所誤った箇所がある。その誤った箇所を次のA群の①〜③のうちから一つ選び、正しく改めたものを後のB群の①〜⑥のうちから一つ選べ。

A群

①文王との出会いが釣りであった

②釣り人のことを「太公望」と言います

③西伯が望んだ人物だったから

B群　選択肢①③④は省略。

②文王が釣りをしている時に出会った

⑤西伯の先君太公が望んだ人物だったから

⑥西伯の先君太公が望んだ子孫だったから

問7　【文章Ⅱ】の傍線部C「佐藤一斎の漢詩は、【文章Ⅰ】とは異なる太公望の姿を描きました。」とあるが、佐藤一斎の漢詩からうかがえる太公望の説明として最も適当なものを、次の①〜⑥のうちから一つ選べ。

※選択肢①②③は省略。

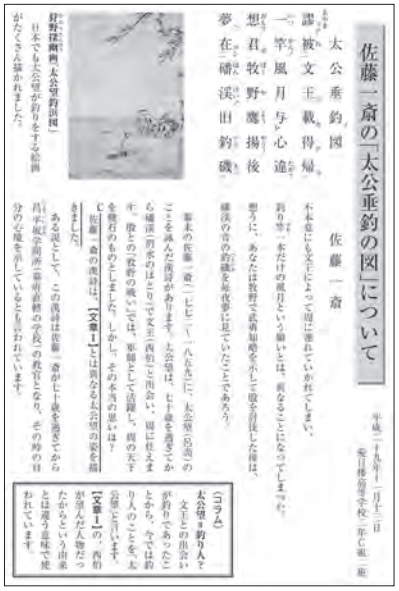
④　第二句「心と違ふ」は、殷の勢威に対抗するために文王の補佐役となったが、その後の待遇に対する太公望の不満を表現している。

⑤　第四句「夢」は、本来は釣磯で釣りを楽しんでいたかったという太公望の望みを表現している。

⑥　第四句「夢」は、文王の覇業が成就した今、かなうことなら故郷の磻溪の領主になりたいという太公望の願いを表現している。

【正解】問6A：③　B：⑤《正答率22・3％》

問7　⑤《正答率32・8％》


佐藤一斎の「太公垂釣の図」について

太公垂釣図　佐藤一斎

謂被文王載得帰
一竿風月与心違
想君牧野鷹揚後
夢在磻溪田釣磯

平成二十九年一月十二日
柴田修学学校　二年C組　亜

不本意にも文王によって周に連れていかれてしまい、釣り竿一本だけの風月という願いとは、異なることになってしまった。
思うに、あなたは牧野で武勇知略を示して殷を討伐した後は、磻溪の岩の釣磯を毎夜夢に見ていたことであろう。

筆者の佐藤一斎（一七七二〜一八五九）に、太公望（呂尚）のことを詠んだ漢詩があります。太公望は、七十歳を過ぎてから磻溪（渭水のほとりで文王（西伯）と出会い、周に仕えました。殷との「牧野の戦い」では、軍師として活躍し、殷の天下を覆すものとしました。しかし、その本当の思いは？

C佐藤一斎の漢詩は、【文章Ⅰ】とは異なる太公望の姿を描きました。

ある説として、この漢詩は佐藤一斎が七十歳を過ぎてから昌平坂学問所（幕府直轄の学校）の教官となり、その時の自分の心境を示しているとも言われています。

日本でも太公望が釣りをする絵画がたくさん描かれました。

荻野探幽画「太公望釣魚図」

〈コラム〉
太公望＝釣り人？
文王との出会いが釣りであったことから、今では釣り人のことを、太公望と言います。
【文章Ⅰ】の「西伯が望んだ人物だったから」という由来とは違う意味で使われています。

【文章Ⅱ】

第5問をふまえた学習活動

主体的な言語活動を取り入れた漢文の授業

立命館慶祥中学校・高等学校　江川順一（えがわじゅんいち）

第5問の出典は司馬遷の『史記』と佐藤一斎を扱った逸話。まず、【文章Ⅰ】で、周の西伯が呂尚（太公望）と出会ったエピソードを漢文の原文で示している。そのうえで、【文章Ⅱ】では、太公望について班ごとに調べ学習を行い、ある班が太公望を詠んだ佐藤一斎の漢詩を題材にまとめた、という想定で、生徒作品例が示されている。

問1〜4は従来型の問題で、漢字の意味や返り点の付け方などを問うている。問5〜7は新傾向の問題で、言語文化における漢詩文の位置、複数のテクストの比較や相違点の理解を問うている。【文章Ⅰ・Ⅱ】を並べて置くことで、漢文の授業における実際の言語活動の流れがイメージできるような試験問題になっている。

このような問題に対しても、普段から言語活動の充実をふまえたアクティブ・ラーニング型の授業を行い、生徒がグループごとに調べたことをまとめるような活動を行っていれば、戸惑うことなく取り組むことができるだろう。

ここでは、大修館教科書の「言語活動」を参考にして、主体的な言語活動を取り入れた漢文の授業を提案したい。

1 李白と杜甫の比較

「詩人の紹介文を書こう―李白と杜甫」（『古典B改訂版 漢文編』）では、李白と杜甫の詩を比較する言語活動を取り上げている。

言語活動

【詩人の紹介文を書こう――李白と杜甫】　李白と杜甫の詩は、今も多くの人々に愛好されている。二人の文学の魅力を紹介する小冊子を作成してみよう。

① クラスで話し合い、「李白と杜甫の人生」「李白と杜甫の詩の魅力」など大きなテーマをいくつか設定し、テーマの数に応じた人数の班を作る。

② 班の中で各テーマの担当者を決める。各担当者はそれぞれのテーマごとに集まって作業班を作り、協力してテーマについてのレポートを作成する。

③ 作成したレポートをもとの班に持ち帰り、班員に説明し情報を共有する。

④ 構成を考え、班員の創意を込めて魅力的な小冊子としてまとめる。

▲『古典B 改訂版 漢文編』p.25

李白と杜甫の詩の魅力を紹介する冊子を作成する、という目的で、グループワークが提示されている。ここで示されているのは、テーマ別作業部会（＝エキスパートグループ）で調査・考察したことを、自分の班（＝ジグソーグループ）に戻って報告し、多様な視点を生かして冊子を作り上げるという展開であり、いわゆるジグソー法的な学習活動となっている。

アクティブ・ラーニングというと身構えてしまう人もいるかもしれないが、日常的にグループでの活動を取り入れることで、漢文の授業がもっと楽しくなり、漢文の魅力がより深く生徒たちに伝わるであろう。

2 桃源郷の考察

「桃源郷の謎を解こう」（『新編古典B 改訂版』）では、陶潛が描いた桃源郷の世界を考察する言語活動を取り上げている。

ここでも、作成班（＝ジグソーグループ）と作業班（＝エキスパートグループ）というグループの組み替えを行うことで、一つのテーマに対して多角的な見方ができ、テーマを深めることができる。作成したレポートをふまえてプレゼンテーション大会などを行い、相互評価や自己評価を行うことで、自分の活動の成果や自分の成長を実感する機会にもなろう。

表現の窓 6

桃源郷の謎を解こう

陶潛（とうせん）は桃源の村をどのような世界として描こうとしたのかを考察し、グループで課題レポートを作成しよう。

1 ●**クラス全体で、「桃花源記」について考える際の検討項目をできるだけ多く挙げよう**

【例】①桃の花が出てくる理由。
②鶏や犬の鳴き声が聞こえる理由。
③太守が桃源の村に行けなかった理由。
④南陽の劉子驥（りゅうしき）が村に行けなかった理由。
⑤老子が「小国寡民」を理想とした理由。
⑥陶潛の人柄と人生。
⑦ヒントになる陶淵明の作品。
⑧「桃花源記」に関する資料。

2 ●**1で挙げた検討項目をテーマごとにまとめよう**

（3の作成班の人数に応じたテーマ数にする。）

【例】・「桃花源記」の内容（1の【例】①③④）。
・老子と「小国寡民」（②⑤）。
・陶潛の人生と作品（⑥⑦）。
・「桃花源記」はどのように読まれてきたか（⑧）。

3 ●**レポートをまとめよう**（作成班⇄作業班）

i 課題レポートを作成するグループを作り、2のテーマの担当者を決める。

ii テーマごとの担当者が集まって新しい作業グループを作り、担当したテーマについて調査、考察し、その結果をレポートにまとめる。

iii 作成したレポートをiのグループにそれぞれ持ち帰り、他のメンバーと情報を共有する。

iv 各グループで、「陶潛は桃源の村をどのような世界として描こうとしたのか」について討論・考察し、その結果を課題レポートにまとめる。まとめる際には、各作業グループの考察結果が必ず内容に反映されるようにする。

v グループごとにプレゼンテーションを行い、考察結果を発表（各グループ一〇分程度）する。

▲『新編古典B 改訂版』p.266

批評と鑑賞

丸山眞男「「である」ことと「する」こと」の知的世界——「思索の現場」から

川口雄一（かわぐち ゆういち）
東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター研究員

丸山眞男（一九一四—九六）の論文「「である」ことと「する」こと」は長年、高校国語教科書に評論教材として採録されてきた。国語教育の分野での教材研究も少なくない。[1]

しかし多くの読者を得たこの論文は、誤読にさらされることが稀ではなかった。著者みずから高校国語教師に宛てた文章「『である』ことと『する』こと」について」でつぎのように述べている。[2]——この論文は「歴史的接近」による「一つの文明批評のこころみ」であり、丁寧に読めば、前近代的な価値規準（「である」こと）から近代的な価値規準（「する」こと）への単線的な歴史的変化を論じたなどという誤読は生まれ得ないはずだ。「蛇足」ながら、過度に単純化した「実践的命題」を「正解」と決めて、著者の複雑な執筆動機や主張を学生に答えさせようとする国語科の設問は、著者の意図に沿わない。[3]

このような丸山の批評に即して、著者の動機や主張を単純な「正解」に帰結させることは不可能でも、致命的な誤読にいたらない方法はある。その一つは、この論文の成立過程を、思索の原初的な状況にまでたどり返すこと。丸山の場合、東京女子大学丸山眞男文庫に一括所蔵されている蔵書やノート・草稿類を活用することで、それが可能である。[4]

論文「「である」ことと「する」こと」にはやや複雑な成立過程がある。もともとは岩波文化講演会「「である」ことと「する」こと」（於・札幌、一九五八年一〇月七日）にはじまる。次いで、これに手を加えた記事が『毎日新聞』に連載（全四回、一九五九年一月九日—一二日）。各回タイトルは「「である」論理と「する」論理」「指導者と制度の良し悪し」「最近の政治的事例から」「戦後文化の問題性」。これらの副題はすべて「現代文明についての一試論」。更にこの記事に手が加えられ、現在一般に流布する岩波新書『日本の思想』（一九六一年）第四論文に行き着いた。[5]

前記の丸山文庫には、右の成立過程に即した草稿・メモ類がある。おもな関連資料は以下の通り（括弧内は資料番号）。

①「「である」ことと「する」こと」メモ（181-1）
②「「である」ことと「する」こと」草稿断片・メモ（181-2）
③「「である」ことと「する」こと」草稿（181-3）
④「「である」ことと「する」こと」速記（369-2）
⑤「「である」ことと「する」こと」草稿（369-3）
⑥「「である」ことと「する」こと」に関するメモ（535）

これらを通じて、「「である」ことと「する」こと」完成にいたる丸山の「思索の現場」（平石直昭教授の言葉）に立ち会うことができる。このうち①②は丸山自筆のメモ。これを手に講演したものと推定される。③⑤は毎日新聞社学芸部原稿用紙に書かれた講演録（不揃）。とくに③には丸山の書き入れが多い。④は岩波書店原稿用紙に書かれた講演録（揃）。一部に丸山の書き入れがある。つまり丸山は、毎日新聞社版の講演録に手を加え、同紙の連載記事を作成、更にその記事を加筆修正し、岩波新書版の論文を完成させたのである（国語教科書版は新書版をもとにその途中を省略したもの）。最後に⑥は、前記「「『である』ことと『する』こと」について」の草稿と見られる。

このうち、講演録には『毎日』版・新書版の双方に見られない言葉がある。「現代日本の知的世界に切実に不足し、

(1) 石井要「教科書の中の丸山眞男——「『である』ことと『する』こと」の教材観史」『国語教育史研究』第一七号（二〇一七年三月）ほか参照。
(2) 松村明ほか編『高等学校国語Ⅱ　教授資料』第三分冊（現代文（下）、旺文社、一九八三年）所収。『丸山眞男集　別集』第三巻（東京女子大学丸山眞男文庫編、岩波書店、二〇一五年）三二七—三三〇頁。
(3) この「蛇足」には、当論文が「正しい行動の指針を得るため」の教材とされてきたことも背景にあったと推測される（前掲石井論文八一頁参照）。
(4) 所蔵資料の概要や利用案内等については、丸山眞男記念比較思想研究センター公式ホームページのほか、丸山眞男文庫スタッフ「丸山眞男文庫バーチャル書庫と草稿類デジタルアーカイブの構築と公開——丸山眞男研究プロジェクト　テーマ2成果報告」『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』第十一号（二〇一六年三月、同じく公式ホームページで公開）等参照。
(5) 丸山『日本の思想』（岩波新書二〇一四年〈改版〉）二〇二頁参照。以下、本文中の頁は、断りのない限り本書を典拠とする。

もっとも要求されるのは、ラディカル（根底的）な精神的貴族主義がラディカルな民主主義と内面的に結びつくこと」という論文末尾の言葉（一九八―九頁）は、「「である」価値と「する」価値の倒錯」状況にたいする丸山の考えを要約したものとしてしばしば言及される。[6] この部分は講演では以下のように表現されていた。

「内面的な世界では価値は、ある種の精神的な貴族主義、ある種の保守主義が要求される。そこでは先に進むことではなく価値の蓄積それ自身が大きな意味をもつ。広い意味で文化活動に従事している者は、精神文化における「である」ことの価値、うちに深く蓄えているものについての確信をもたねばならぬ。確信をもつことによって、そういう文化の立場から政治をきびしく判断し、きびしく批判していく。「である」ことの原理から、「である」ことの文化における「である」ことの価値を確信することによって「する」ことの立場からの政治をきびしく批判していくという態度でなければならぬ。これは「である」ことと「する」ことの倒錯現象がみられる日本においては非常に必要なのではなかろうか。誤解を招きやすい表現だが、日本ではある意味においての文化的次元での保守主義と、政治的な急進主義が結びつくこと、文化的な保守主義に基いた政治的なラジカリズムが非常に要求されているのではないかと思われる」（読点は一部加除した。以下、草稿からの引用は同じ）

この草稿（⑤四三―七頁）によって、丸山の主張はより明確になる。彼は、「政治」の世界では「する」論理を徹底させるべきであり、学問・芸術の世界では「である」価値を保持するよう努めるべきだという。現代日本で、前者にはまだ「である」価値が残っており、逆に後者には「する」論理が浸透して来てしまっている――そうした倒錯現象があることを問題視し、その再転倒を丸山は主張した。

しかし、そうした政治的なものと非政治的なものとの区別によって、前者を政治家など一部の人びとの日常的な営みと解するならば、それも丸山の意図から外れる。[7]（一九〇―二頁参照）。たとえば次のような自筆のメモがある（②九頁）。

「政治活動をするものは本来（内在的に）政治に興味をもつもの、もしくは本来の政治家だけであり、本来教育をやっているもの、本来工業や商業に従事して田を耕しているものは、政治とは無縁であるという考え方はわれわれ周囲のいたるところにある。〔…〕行動が属性（職業的所属や性質）に還元される傾向がこういうところにも現われている。

→教育者が政治屋になること、また
　すべての問題を政治化し拡大する。

教育者の政治活動 ⟷
→教育は政治と別だから、
　政治活動すべきではない。
　すべての問題を孤立化する。）悪循環」

要するに、文化的な「である」価値に奉仕している学者や芸術家、教育者であっても、市民・社会生活を営む上では「する」論理に立脚すべきであることを説く。

しかし同時に、学問・芸術も、職業的従事者（大学生を含む）のみの専有物ではない。あらゆる人びとの日常に開かれているべきものである。A・シーグフリードに依拠した丸山の「教養」論（一九六―七頁）はそのことを示唆する。[8]

冒頭で紹介した「「『である』ことと『する』こと」について」の末尾はつぎのような文で締め括られている。[9]

「私達がごく身近に日常的に見聞し、それだけに格別に注意を払わないで看過してしまうような出来事や事柄について、一度立ちどまって「はてな」とその背後に潜んでいる象徴的な意味を問いかけたり、一見何の関係もなさそうな他の出来事とのつながりに思いをめぐらす習慣を養うというところに、学問的訓練の大きな意義がある。そこから何も一定の行動が導き出されるわけではない、という意味では、こうしたこころみは一種の「遊び」ともいえるが、そうした遊びを通じて学問的認識の面白さを学習者にいくらかでも覚らせないかぎり、とくにこの文のような文明批評を教材に用いる場合には、結局のところ一つの道徳的説教に終ってしまうのではなかろうか」

この「遊び」は前述の「教養」と親和性をもつであろう。「である」価値と「する」価値との倒錯現象の再転倒を課題とした丸山の主張は、「教養」「遊び」としての「文化的創造」による「人間性」の恢復をめざしている。[10]

(6) 宮村治雄『丸山真男『日本の思想』精読』（岩波現代文庫、二〇〇一年）七〇頁以下参照。

(7) 『日本の思想』第二論文等を参照。前掲「「『である』ことと『する』こと」について」では、同書第一論文の併読の必要が示唆されているが、前述の成立過程を想起するなら、同書収録の全作品に目を通すことが第四論文の理解を深める上で著者の意に沿うだろう。

(8) 丸山文庫所蔵の『現代――二十世紀文明の方向』（杉捷夫訳、紀伊國屋書店、登録番号0187937）には、丸山の書込み・折込みがある。

(9) 前掲『丸山眞男集 別集』第三巻三三〇頁。苅部直「「遊び」とデモクラシー――南原繁と丸山眞男の大学教育論」『政治と教育』（年報政治学二〇一六―I、木鐸社、二〇一六年）参照。

(10) たとえば、丸山「人間と政治」（『政治の世界　他十篇』松本礼二編、岩波文庫、二〇一四年所収）、同「現代文明と政治の動向」（『超国家主義の論理と心理　他八篇』古矢旬編、岩波文庫、二〇一五年所収）等参照。

「「である」ことと「する」こと」草稿断片・メモ（181―2）一ページ目の画像を、小社新刊『トータルサポート新国語便覧』丸山眞男の項に掲載。

「「『である』ことと『する』こと」について」を、小社教科書『現代文B改訂版 上巻』[現B329]『精選現代文B 新訂版』[現B331]指導資料「補助資料集」に掲載。

寄稿

授業実践
（国際バカロレア）

文学と社会——社会的事象の表象を通して文学の役割を考える

杉本　紀子
東京学芸大学附属国際中等教育学校

◆国際バカロレア（DP）最終試験終了後に取り組む「文学」

文学は人生や生き方の問題と関連させて語られることが多い。だが、ともすればそうした語り方は道徳的・倫理的・教育的役割を持つものとして文学を語ることに陥る危険性をはらんでいる。もちろん文学にはそうした側面もあるだろうが、「よりよい生き方」「理想的な生き方」「よりよい社会」「理想的な社会」のあり方のみを描いたり考えさせたりする作品ばかりではないことは明らかである。いったい「文学」とは何か、人はなぜ「文学」を生み出し、「文学」を読むのか——。

稿者の勤務校では国際バカロレア（IB）のプログラム（MYP〈中・高1〉・DP〈高2・3〉）を取り入れている。IBDPの「言語A」（日本の「国語」に当たる）における「文学」のコースでは、主たるテキストだけでも13作品を扱う。読解のための補助教材や生徒が収集する補足的な参考作品を含めると、かなり多くの文学作品と一年半あまりの長期間に亘って取り組むことになる。

IBDPの最終試験は、日本のカリキュラムに合わせた場合は高校3年生の11月に実施される。DP最終試験終了後の授業は、実際には学校毎に行われていることが違うようであるが、本校では、あくまでも「文学」の授業を継続し、生徒が「文学」についてどのような理解にたどり着いているのかを振り返り、確認することとした。本稿は、その授業の様子を紹介するものである。

授業の内容的なねらいは、これまでの学習を総括すべく、同じ要素やテーマが語られる文脈の違いを作品ごとに読み取り、その文脈がどのような背景を持っているのか、その文脈を形成している要素は何であるのかを考え、作者の創り出す文脈と読者が読み取る文脈に「社会」そして「社会の記憶としての言葉」がどのように働きかけるのかまでを考えることに設定した。また、今回は、単元のテーマとして「差別」を設定し、それを読み解くための一つの鍵として「ハンセン病」を扱ったが、それには次のような理由がある。

【理由1】本校はスーパーグローバルハイスクール（SGH）として課題研究の大テーマの一つに「葛藤と軋轢」を設定している。DP生の中には、課外活動でSGHの課題研究に取り組むものもいる。そうした生徒たちの学習の深化を支える仕組みをDPの授業内でも設けたいと考えた。

【理由2】本校には多様な背景を持つ生徒が学校内にいる。国籍は日本には限らない。更に言えば二つの外国籍を持つ生徒もおり帰国生も多い。理不尽な差別を体験的に知っている生徒もいる。そうした中で生徒が「文学」と「社会の現実」をどう結びつけて読むことができるのかに挑戦したいと考えた。

【理由3】「文学」を読む意義を教養主義的な視点以外から考える機会を設けたいと考えた。

○実践

【対象生徒】DP履修生徒（6年生［高3］）

【教材】『いのちの初夜』（北條民雄　角川文庫　一九九四年）・『あん』（ドリアン助川　ポプラ文庫　二〇一五年）

【その他のリソース】

・『今昔物語集』「比叡山ノ僧侶心懐、嫉妬ニヨリテ現報ヲ感ジタル物語」・『宇治拾遺物語』「智海法印癩人と法談の事」等の古典

・「癩予防ニ関する件」から「らい予防法の廃止に関する法律」（平成8年）（らい予防法の廃止）までの条文抜粋

・「探検バクモン——ハンセン病を知っていますか」（NHK）・映画「砂の器」・映画「あん」

単元の指導目標

1社会的な事象や課題（今回の場合は「ハンセン病」とそれに対する差別）が文学作品においてどのような文脈で扱われているかを読み解き、作品の主題との関わりについて批評する。

2文学作品の主題やモチーフが、現実社会の事象や我々の価値観にどのような影響を与える可能性があるかについて探究する。

単元の評価規準

《規準A　知識・理解》

①作品の社会的背景について、調査をもとに整理して理解できたか。

②作品を社会的文脈の中に位置づけて解釈できたか。

《規準B　分析》

①言葉・表現・文脈・文体などに着目して作品を分析的・批判的に読むことができたか。

《規準C　構成》

①作品と社会的事象の関係を的確にとらえ、論理的に述べることができたか。

学習指導過程

【第1時～第3時】

・言語表現における差別とハンセン病の関わりについての通時的把握

この3時間では今回の単元で扱うテーマ「差別」と「ハンセン病」についての確認と情報整理を行った。第1時では社会的な「差別」にはどのようなものがあるか、またこれまで読んだ作品の中で「差別」がどのように表象されていたかの確認を行った。また第2～3時にかけては「ハンセン病」と

それに伴う差別が古典や映画にどのように描かれてきたのか、あるいは法律条文にはどのように述べられてきたのかを読み取り、そこに見られる当時の社会の価値観や態度を確認した。

古典作品においては、必ずしも現代における「ハンセン病」と断定できないものも含まれているが、科学や医療が発達していなかった時代において病を抱えた人々がどのように表象されてきたのかが捉えられればよいこととした。

古典作品から生徒が読み取ったこととして重要な点は、古典作品に描かれる患者や病は隔離的差別を受ける対象ではなかったという点である。古典においてはこの病が宗教と結びつき「仏罰」として扱われることはある。そうした意味で特別視されたり、社会的に下層に置かれたりした人々という形で作品に表れはするが、「差別」的な態度の質が近代以降とは違っている点が興味深い。

また、法律の条文については生徒自身が「法律にも文脈がある」という点を指摘していた。明治以降の法律において、本来客観的で公平であるべき法律の条文が、実は社会の価値観を反映しており、患者の保護や病気の予防を述べるはずが、かえって患者を差別する方向への文脈を形成してしまっていることに気づき衝撃を受けていたのである。この時点で議論のポイントとして挙がった点として「無知は偏見を生むのか」と「我々は何を知るべきなのか」という問いがある。これは文学の役割を考えていく上でも、授業の終盤まで一貫して生徒の中で保たれ続けた問いとなった。

	『いのちの初夜』	『あん』
ハンセン病	・肉体と精神を分離させるもの。 ・病としての肉体的・精神的困難を描写。 ・肉体と精神の葛藤。	・形式的には「忘れられた」解決済みの社会問題。 ・社会から一線を引かれた、過去のものとして置き去りにされているもの。
差別	・受容する・納得しようとすることを通じて差別を越えて患者として生きる姿勢を示す。 ・作者自身が持つハンセン病に対する恐怖や偏見が生む自身への差別。 ・社会全体の「傾向」として存在するもの。	・社会に生きる「個人」が生み出すもの。 ・科学的知識よりも歴史的・時代的背景のもとで造られた印象の方が強く働く現代社会が生み出すもの。

【第4時～第6時】

・テキスト読解――比較分析

主たるテキストは北條民雄『いのちの初夜』とドリアン助川『あん』である。テキストは単元開始時に自宅で読んでくるよう指示し、第4時からは読んできたことを前提に、比較分析を行った。二作品の比較から読み取れたことは、各自にレジュメの形で整理をさせ、それに基づいてクラスでディスカッションをさせた。教員は原則として議論を整理する役割に徹し、生徒は四人一組で自由に意見を述べ合う形をとった。上の表は「ハンセン病」「差別」が、各作品において、どのような文脈に置かれているかということについての生徒の意見の一部である。

【第7時・第8時】

・小説と映画の比較

小説二作品の分析を踏まえ、『あん』について小説と映画の比較を行った。メディアの違いはどのような文脈の違いを持つのかについて考え、読者や視聴者を含む「社会の記憶」が、どのような言葉や表現となり、差別を表象するのかについて話し合いを行った。

【第9時・第10時】

・論評作成

作品解釈とこれまでの議論を踏まえ、文学作品における差別がどのように表象されているか、またその表象の仕方が表す意味について論評を作成した。

論評は先に示した三つの規準で評価した。この単元の目的は単なる作品解釈にとどまらず、社会的事象との関わりにおいて文学の役割を考えさせることにあった。はたして生徒はどのような考えに行き着いただろうか。

【生徒A】論評抜粋

小説は人々に伝えられる現実の事象が、実際に人間とどう関わりをもっていたのかを伝えている。事実の記録ではなく、個人の生き様に焦点をおき、一人の人生を捉えているからこそ、人々は作品に描かれる世界を自身に捉えて考えるようになる。これは小説をはじめとする文学が存在することの社会的意義に通じている。

○実践のまとめ

生徒達は今回の学習を通して文学の役割を「個人の感情や人生を具体的に描き出すこと」とまとめた。例えば「差別」という社会的事象は、ともすれば社会全体の「傾向」や「風潮」のように語られてしまいがちであるが、それを個々の人間の関わりの中で描き出すのが文学であるという結論である。生徒の気づきを踏まえてみると、授業において主軸となっていった「無知は偏見を生むのか」「我々は何を知るべきなのか」といった問いも、実は文学の役割を焦点化していく支えとなっていたことがわかる。事実や情報を「知る」ことは重要だが、一方でそうした知識自体が「偏見」や「差別」を生むことにもなる。だからこそ「一人の人間」の声を読み解き、分かろうとすることが必要なのだということである。

◆おわりに

世間ではIBDPの価値や意義が大きく取り上げられているが、実は今回のような単元づくりは従来日本の国語科教育においても行われてきたことである。問題は教員側がいかなるねらいをもってテキストを選択し、そのテキストを扱う文脈をいかに多様に準備しておくかということであろう。意外に思われる方もいるだろうが、DPにもテキスト選択上の規制はある。ただしそのテキストを「どう読むか・どう扱うか」については授業者が自ら考えねばならない。つまりは常に教材研究の根本に立ち返ることになるのである。

〈好評既刊〉
『国語教師のための国際バカロレア入門
――授業づくりの視点と実践報告』
半田淳子 編著
A5判・一九二頁・本体二二〇〇円＋税

▼新連載……教室が活発になる授業のアイディア

詩を評価し、表現や効果を深く考える授業

▼教材
「竹」
萩原朔太郎

東京都立大泉高等学校
附属中学校
玉腰朱里（たまこしあかり）

「現代文」の近現代詩や短歌・俳句を授業でどのように扱っていますか。生徒が詩に興味をもって作品を読み味わうために、どのような活動が考えられるのでしょう。
都立校の教壇に立つ先生のご実践を紹介します！

◢授業のねらい◣

この授業では、近代詩「竹」を二時間で展開します。授業の目的は、マトリックス（評価軸）を使った詩の評価や意見交換を通して、詩の表現の特色や効果を深く正確に考えることです。漫然と詩を読み、表現技法を確認しておしまい、ではなく、生徒同士が主体的に関わり合ってグループワークで詩の理解を深め、楽しみながら深く詩を味わうことができないかと考え、この授業を展開しました。

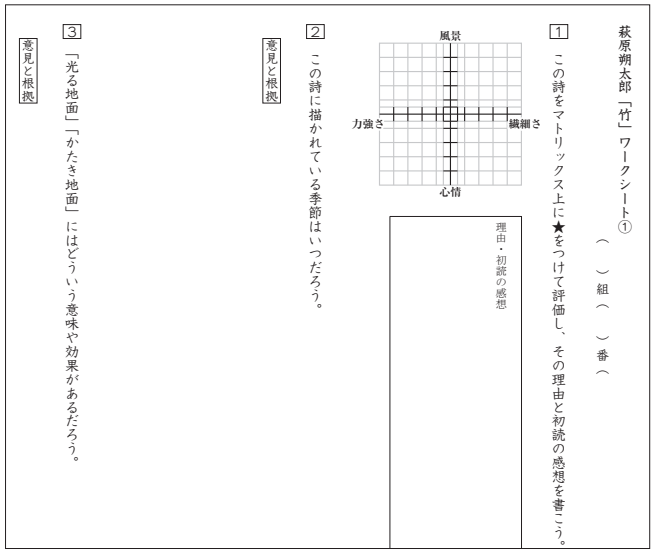
授業のポイントは、評価の観点を明示したマトリックスを使うことです。これにより、生徒の初読の感想や評価をグループワークの際に共有しやすくすると同時に、初読の感想から読解後の感想への読みの変容を視覚的に明確にすることができます。

◢授業の流れ◣

授業は全二時間扱いとします。

第一時で生徒は、難読語などの読みの確認をしてから、初読の感想と詩の評価を書きます。生徒が書いた感想や評価を学級全体で共有しながら、まずは一斉授業の形態で詩や教材に関する正確な知識を学習します。語義・詩の表現技法・表現の特色・リズムやその効果などの知識を踏まえて、

①作品の季節はいつか


萩原朔太郎「竹」ワークシート①
（　）組（　）番（

1 この詩をマトリックス上に★をつけて評価し、その理由と初読の感想を書こう。

風景
力強さ　繊細さ
心情

理由・初読の感想

2 この詩に描かれている季節はいつだろう。

意見と根拠

3 「光る地面」「かたき地面」にはどういう意味や効果があるだろう。

意見と根拠

ワークシート①（第１時使用）
その他のワークシートは小社ウェブサイト「WEB 国語教室」掲載。

②「光る地面」と「固き地面」がもつ意味やその効果は何かという二つの問いを生徒に提示して、根拠を明確にして自分の考えを書きます。ここで、「自分の考えの根拠を明確にする」ことが次の活動につながるポイントです。

第二時では、前時に考えた二つの問いについての考えをグループで話し合います。今回は、四人グループになって、本文や事実に明確な根拠があるかどうか確認しながら、互いの意見を交流しました。ここで、グループ内の評価が高い意見や、ユニークな意見を学級全体で共有すると、多角的な詩の読解の視点を発見させることができます。意見交流が終わったら、初読時と同じマトリックスで教材を再評価し、自身の意見や評価の変化をふまえて、教材の一言まとめを記入します。一言まとめを数名に発表してもらい、最後に、単元の学習活動全体を各自で自己評価させて、この単元のまとめとします。

◢学習の実際と生徒たちの反応◣

この指導案で授業を行った際の、生徒たちの様子を紹介します。

……第一時……

授業はまず、生徒に繰り返し音読させることから始めました。全員起立して、本文を三度音読し終えた生徒から座るよ

う指示したところ、一度目は恐る恐る読みを確認しながら音読していましたが、周りの生徒の音読を聞く余裕も出る二度目・三度目は、リズムを意識しながらテンポ良く音読する生徒も増えていきました。

主な初読の感想は、次の通りです。

・最後の部分の竹を連呼しているところに力強さ、そして見渡す限り竹が生えている様子を描いているところに情景を感じた。読んでみて、竹になったような感じがした。
・竹のまっすぐ伸びる力強い様子が浮かぶように感じた。
・竹の生き様を細やかに描いている印象を持った。繊細な描き方からは、竹という植物ののびのびとした美しさを感じた。

初読の評価では、「風景」と「力強さ」を表すマトリックス上の左上に★をつける生徒が大多数を占めました。ここで書いた感想や評価を、席の近い生徒で交流し、何名か発表した後、文学史や近代詩の表現技法の学習に移りました。「竹」を既習の生徒もいたため、技法などについては復習として発問と生徒の発言を中心に学習しました。

第一時の最後に、問①と②について個人の意見を書かせました。①の季節については、「凍れる節々」を根拠にして、「冬」とする生徒が多くいましたが、机間指導の中で「本当にそう言い切れる?」、「おっ、春って書いている人もいるよ」などと言って揺さぶりをかけると、生徒は改めて「青竹」という言葉を辞書で調べたり、国語便覧の該当ページを読んだりしながら、「柔らかい根が生えるのは初夏」、「青竹が季語だから、夏」など、意見を多様に膨らませていきました。

……**第二時**……

第二時では、前時の復習と音読をした後、①と②の二つの問いについてグループで話し合いを行いました。中には、「『光る地面』には、暑い太陽が降り注ぐ夏の季節を強調する効果がある」などと根拠に欠ける考えを述べる生徒もいましたが、メモを取り、互いに根拠を確認しあう中で、その生徒の考えも修正されていく様子が見られました。

こうしてグループで共有した意見のいくつかを学級で共有した上で、個人で教材の再評価と教材の一言まとめを書きました。生徒の多くは、初読の時の自分の感想や評価と比較したり、他の生徒との意見交換を踏まえたりして、この詩を評価・考察しながら感想を書いていました。再評価にあたって、中には、次のように考えが変わった生徒もいました。

・初めは、ただ竹が生える様子を様々な言い方で表現している詩だと思っていたが、考えてみれば、目に見えないところ（地下）で繊毛が「かすかにふるへ。」などと表現されているから、この詩は竹以外の何か人の心や生き方などの心情を竹に喩えたものだと思った。
・力強くそびえ立つ竹の生え始めの頃の「不安」な気持ちを、細い根の様子などを出して表していることに気づいた。景色をそのまま書いているように感じたが、実は竹の成長と感情とを合わせたものを、流れるようなリズムで書いているのだと思った。第一連があることで、第二連に書かれている力強さが強調されていて、全体を通して力強さが感じられる詩になっている。
・竹が伸びる姿から、私は、その場の景色を描いているのではないかと初めは思った。しかし、土の中まで描く繊細さを感じる人がいたり、風景・心情どちらでもないのではないかと言う人がいたり、詩は同じでもこんなにいろんな意見があるんだ、という気持ちになった。

これらの意見や教材の一言まとめを数名に発表してもらい、単元のまとめとして学習活動を自己評価しました。

▶評価について◀

本単元はワークシートの記述とグループや学級での話し合い活動を中心に読解を進めるため、評価はそれらの点検や観察で行うことができます。また、第一時に学ぶ表現技法や詩の表現の特色がもたらす効果を、根拠を明確にして答えられるかを考査等で問うこともできます。

また、ワークシート②の最後にはルーブリックによる単元の自己評価表を用意し、生徒自身も自己評価を行います。このルーブリックは、単元の学習に入る前に確認し、達成度の目安を意識させることで、生徒の到達目標を明確にできます。ワークシート②では、関心意欲態度・読む能力・知識理解の三項目をS～Cの四段階でルーブリック評価させるだけでなく、三項目のバランスよい習得を生徒自身に意識させるために、自己評価の下にあるレーダー表に色塗りをさせます。

この中で、関心・意欲・態度として評価する「話し合い活動への貢献の仕方」は、周囲の人に話題を提供したり、話し合い活動を円滑に進めるための雰囲気作りをしたり、司会や書記を務めたりするなど、生徒の個性とグループのメンバーに応じた様々な貢献の仕方が考えられます。

▶授業を振り返って◀

『竹』を学習したのはたった二時間でしたが、生徒にとっては印象に残る時間だったようで、授業アンケートでそのように言及している生徒も多くいました。この実践を通して、詩教材は多くの指導方法と指導内容の可能性があり、短い授業時数の中でも生徒の考えを交流しながら考えを深める授業を構成しうると、改めて実感しました。

いま、漱石を読む〈第5回〉

語りは文学か——『夢十夜』「第一夜」

石原千秋（いしはらちあき）
早稲田大学教授

なぜ夢らしく見えるのか

『夢十夜』を教室で読むときに避けて通れないのは、「なぜ夢らしく読めるのか」という問題だろう。「第一夜」も例外ではない。そこから考えてみたい。

いまでは文学研究上の常識になっているかもしれないが、ジェラール・ジュネットは、語り手は登場人物との情報量の差によって三パターンあるとしている（『物語のディスクール』）。①語り手＜登場人物（いわゆる全知とか神の視点と言われる語り手である）、②語り手＝登場人物（一人称小説である）、③語り手＞登場人物（あれ？　と思うかもしれないが、推理小説の語り手で、誰が犯人かを知らない）である。

『夢十夜』は「自分」という一人称の語り手だが、「自分」には知り得ないことが書いてある。つまり、「自分」が語り手である以上②であるべきなのに、①でなければ得られない情報が書き込まれているということだ。それが、夢らしく読める最大の秘訣である（藤森清）。「第一夜」に関しては、星のかけらを拾ったなどもいかにも夢らしいが、「自分」が百年経った（かどうかが問題なのだが、それはあとで）と気づいたところで「自分」の一生や認識を超えていて、夢らしいと感じられるだろう。

もう少し微妙なポイントもある。それは、はっきりした異化表現がいくつかあることだ。比喩と見分けにくいので説明しておこう。比喩は「彼女の頬はリンゴのように赤い」（直喩）のように「彼女の頬」と「リンゴ」は似ている（類似）関係にある。一方、異化表現とはそのものをはじめて見たもののように過度に描写するレトリックで、言い換えなのでイコール関係にある。「第一夜」でははっきりした異化表現が二つある。一つは、「長い睫に包まれた中は、只一面に真黒であった」は、すぐあとの「黒眼」の異化表現（過度な描写）である。すなわち「長い睫に包まれた中は、只一面に真黒であった」＝「黒眼」である。もう一つは、「静かな水が動いて写る影を乱した様に、流れ出した」＝「涙」である。これに「赤い日」を数えることが「一日」の異化表現と捉えることもできる。語り手にはそれぞれ「黒眼」、「涙」、「一日」とわかっているが、「自分」はそれがすぐにはわからないようだ。つまり、②なのに①的なテイストがあるわけだ。これらも「第一夜」を夢らしく見せている。

「わからない」が開く世界

「第一夜」の異化表現はどのようなことを教えてくれるだろうか。二つ挙げておきたい。

第一は、いま「自分」は「自分」の理解できない、わからない世界にいるということである。それが「第一夜」を夢らしくみせていることはいま確認した。「自分」にとっての最大の謎は、冒頭にある。「女」は血色もよく「到底死にそうには見えない」のに、「もう死にます」と言う。「自分」はいったんは「確にこれは死ぬな」と思ったものの、「女」の瞳を見て不自然に思ったのだろう、「これでも死ぬのかと思った」。そして短い会話を交わした後も、やはり「どうしても死ぬのかなと思った」と疑問に思っている。はっきりした異化表現が二つとも「女」の「眼」を表現しており、「自分」にとってその「女」の「眼」が生き生きしているように見えることが、「もう死にます」という言葉と一致していないのである。「自分」の疑問を異化表現が支えているわけだ。

第二は、「女」の「眼」がそれ自体で特別な意味を持つことだ。「じゃ、私の顔が見えるかい」という「自分」の問いかけに、「女」は「見えるかいって、そら、そこに、写ってるじゃありませんか」と答える。いま傍点を施した「そこに」がおかしいのだ。「自分」が「私の顔が見えるかい」と問いかけ、「女」がそれに答えた以上は、「ここに」（女の眼）でなければならないはずだからである（三上公子）。「そこに」では「自分」の方の眼を指してしまう。どうやら、もう「自分」と「女」は二人で一人になってしまっているようだ。そして、異化表現が「涙」を「水」と表現しているからには、「女」の「眼」は水鏡でもあるようだ。そう、「鏡の国のアリス」だ。ファンタジーにおける鏡は、この世界と他界との境界の役割を果たす。「自分」が鏡の向こうの世界に行くのは、ファンタジーの定めというものだ。

「女」は死んで他界に行ったが、二人で一人となった「自分」は、もう「女」の言う通りのことしかできない。真珠貝を使って、みごとなファンタジーテイストで墓を作り、「女」を埋葬した。そして待つ。ただ待つ。ひたすら待つ。

そのうちに、女の云った通り日が東から出た。大きな赤い日であった。それが又女の云った通り、やがて西へ落ちた。赤いまんまでのっと落ちて行った。一つと自分は勘定した。

しばらくすると又唐紅の天道がのそりと上って来た。そうして黙って沈んでしまった。二つと又勘定した。

何も「女」に言われなくとも、太陽は東から昇って西に沈むものだ。しかし、「自分」はそれは「女」がそう言ったからそうなっているように思っているらしい。「自分」は「女」の支配する時間を生きはじめているのだ。

ところが、いくら赤い日を勘定しても、「それでも百年がまだ来ない」。だから、「自分は女に欺されたのではなかろうかと思い出した」。この「女」への疑念は限りなく重要である。なぜなら、「自分」が「女」の支配する時間を生きて、すんなり他界に行ったとしたら、それは劇的でも何でもないからである。障害は大きければ大きいほど、それを超えた喜びも大きい。「自分」の「女」への疑念が百年分ふくらんで、「女」がまったき他者となったればこそ、すでに他界にいるだろう「女」との再会（?）が劇的なものになり、「自分」に無上のエロスをもたらすからである。

再会したのかしないのか

「自分」は「女」と再会したのかしないのか。答えが一つに決まったら、「第一夜」の魅力は半減する。いや、そもそも文学の魅力は半減する。

もっとも、答えは簡単に出るという人もいる。最後に「自分」は「百合」を見るが、「百合」という言葉は「百」と「合う」の組み合わせだから、「百年後に合った」というわけだ。こうして解決する人は決して少なくない。文学はどういうレベルで読んでも構わない言葉の芸術だから、こうして文字のレベルで読んでもいい。ただし、この解釈は生産的ではない。仮に教室でこの解釈が示されてもそれ以上議論にはならないだろう。納得するかしないかだけだからである。「なるほど」と受けて、先に進むしかない。

再会したとする解釈と再会していないとする解釈を一つずつ挙げておこう。

再会したとする解釈の決め手になるのは、「百年はもう来ていたんだな」という「自分」の気づきにあることは言うまでもない。「女」は「「百年待っていて下さい」と思い切った声で云った」。「百年、私の墓の傍に坐って待っていて下さい。きっと逢いに来ますから」と約束したのだった。そうである以上、「女」は「百合」に姿を変えて「自分」に逢いに来たと考えるしかない。「自分」が「百合」を「女」だと信じない限り、「百年はもう来ていたんだな」とは思えないはずだからである。論理的にはこうなる。

もしかしたら、「暁の星」を見上げて「百年はもう来ていたんだな」と「気が付いた」その時、「自分」は目の前の「百合」が「女」だと思ったのかもしれない。そこには、「自分」の解釈が入っていたはずだ。そして、その解釈は読者のものではなかっただろうか。つまり「百年はもう来ていたんだな」と「自分」が「気が付いた」と読んだとき、読者も「百合」は「女」だと解釈して、それを「事実」だと思い込んだという意味である。これが再会説の実態ではないだろうか。

それではこの解釈を引きはがすことはできるだろうか。それが再会しない説につながる。最後の段落を読んでいくと気づかされることがある。「すらり」、「首を傾け」、「ふっくらと」、「ふらふらと」、など、「百合」の記述が擬人法かそれに近い表現になっていることである。解釈以前に、「百合」は「女」と読めるように仕組まれていたのだ。それは語りの力だと言っていい。だから、この語りの力を取り払えば、「百合が逢いに来た。女は来ない」ということになる（松元季久代）。これは語りの力を取り払って、意味内容だけを読んで導き出された結論である。その限りにおいてまちがってはいない。

そこで最後の文学的な問いがやってくる。語りの力を取り払って意味内容だけを読むことがはたして文学か、と。語りの力に無自覚なのは知的ではないかもしれない。しかし、文学の愉楽は語りの力に身を任せることにあるのではないだろうか。「第一夜」は語りの力と意味との間で揺れ動く。「第一夜」の授業は、再会したか否かを決めることにあるのではなく、なぜそのように読めるのかを知ることにある。その意味で、もっとも文学的な教材なのである。

ついに発表！ 高等学校学習指導要領（案）

編集部

二〇一八年二月一四日、高校の新しい学習指導要領の案が公表されました。パブリックコメントの募集を経て、三月には正式な指導要領が発表される予定です。本誌がお手元に届く頃には読者の先生方もその内容をご存じのことでしょう。ここでは、（案）の段階の学習指導要領の国語科の概要と、ポイントをご紹介します。

高校国語　科目の再編成　　○は必修

改訂前			改訂後	
科目	単位数	→	科目	単位数
○国語総合	4	→	○現代の国語	2
現代文Ｂ	4	→	○言語文化	2
古典Ｂ	4	→	論理国語	4
国語表現	3	→	文学国語	4
現代文Ａ	2	→	国語表現	4
古典Ａ	2	→	古典探究	4

■必修科目

必修科目は現行の「国語総合」（4単位）の代わりに、次の二科目になります。

【現代の国語】 2単位

目標に「実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする」とあり、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の三領域の指導事項が掲げられています。「話すこと・聞くこと」の領域が設定されているのは、高校国語の中では、「現代の国語」と「国語表現」だけです。また、言語活動例（「内容（2）」）として、論理的な文章や実用的な文章を読み、論述したり批評したりする活動が示されています。

【言語文化】 2単位

目標に「生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする」とあり、「書くこと」「読むこと」の二領域の指導事項が掲げられています。「読むこと」のうち、古典は40～45時間、「近代以降の文章」を20時間程度配当するとしています。「書くこと」の言語活動例として、「本歌取りや折句などを用いて、感じたことや発見したことを短歌や俳句で表したり、伝統行事や風物詩などの文化に関する題材を選んで、随筆などを書いたりする活動」という一項目が示されています。

■選択科目

選択科目は四科目、いずれも4単位です。「国語表現」は3単位から4単位になりました。「現代文A」「古典A」という2単位の科目はなくなり、科目名から「現代文」という文言がなくなって、「論理国語」「文学国語」になりました。

「論理国語」は、報告文や短い論文をまとめたり、論理的な文章や実用的な文章を読んで批評したりする活動が想定されているようです。「文学国語」は、作品について書評を書いたり、小説や詩歌を創作したりする活動が例示されています。

■今後のスケジュール

高等学校の新学習指導要領は、二〇一八年三月の公表後、二〇二〇年四月に必修科目、二〇二一年四月には選択科目の教科書の検定受付があり、それぞれ翌年に教科書採択が行われます。そして、二〇二二年から「現代の国語」と「言語文化」が、二〇二三年から選択科目四科目が、新しい教科書にもとづいてスタートする予定です。

2018年
　3月 新指導要領発表
2020年
　4月 必修科目 検定受付
2021年
　4月 選択科目 検定受付
4～9月 必修科目 教科書採択
2022年
　4月 必修科目 スタート
4～9月 選択科目 教科書採択
2023年
　4月 選択科目 スタート

新指導要領　国語　各科目の概要

	科目名	単位数	領域と配当時数	科目の概要*
必修	現代の国語	2	話す・聞く 20－30 書く 30－40 読む 10－20	**実社会・実生活に生きて働く国語の能力を育成する科目** ・論理的な文章や実用的な文章を読んで論述したり批評したりする。 ・スピーチ、報告、議論、発表などをしたり、紹介文、案内文、通知文、報告書などを書いたりする。
必修	言語文化	2	書く 5－10 読む［古典］ 40－45 ［近代以降］ 20	**上代から近現代につながる我が国の言語文化への理解を深める科目** ・伝統や文化について書かれた解説や評論、随筆などを読み、論述したり発表したりする。 ・本歌取りや折句を用いて短歌や俳句を作ったり、随筆などを書いたりする。
選択	論理国語	4	書く 50－60 読む 80－90	**多角的・多面的に理解し、創造的に思考し、論理的に表現する能力を育成する科目** ・社会的な話題に関する論説文や資料を読み、自分の考えを論述したり討論したりする。 ・複数の文章を読み比べて論じる。
選択	文学国語	4	書く 30－40 読む 100－110	**小説や詩歌等に描かれた心情や情景、表現等を読み味わい、その創作に関わる能力を育成する科目** ・小説や詩歌などを創作し、批評し合う。 ・作品について書評を書いたり議論したりする。
選択	国語表現	4	話す・聞く 40－50 書く 90－100	**表現の特徴や効果を理解し、適切かつ効果的に表現して他者と伝え合う能力を育成する科目** ・スピーチをしたり面接の場で話したり、連絡、紹介、依頼などのために話したり聞いたりする。 ・企画書を書いたり、インタビューを報告書にまとめたりする。
選択	古典探究	4	読む 140	**自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する科目** ・古典の作品や文章を読み、興味をもったことや疑問に思ったことを調べて発表したり議論したりする。 ・古典作品に関連のある事柄について調べ、発表したり報告書にまとめたりする。

*「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」の文言や「学習指導要領（案）」の言語活動例をもとに、編集部でまとめたもの。

古典のとびら

鄙の風土が生む幻影

――大伴家持生誕一三〇〇年に寄せて

多田一臣
二松学舎大学特別招聘教授

■「越中秀吟」の冒頭歌

大伴家持がいつ生まれたのかは、実のところはっきりしない。とはいえ、さまざまな状況証拠から、養老二年（七一八）の生まれと見るのが、ほぼ現在の通説とされている。それに従うなら、本年が家持生誕一三〇〇年の記念の年になる。

そこで本稿だが、編集部から家持について書くよう求められた。家持の作は、現行の教科書では「春愁三首」（巻十九・四二九〇～四二九二）が取り上げられることが多い。「春愁三首」については、教科書に採録されることの適否も含めて、すでに何度か論じたので、ここでは「越中秀吟」（巻十九・四一三九～四一五〇）の冒頭歌について述べてみたい。これも比較的多くの教科書に収載されている歌である。二首一連の題詞をもつ作なので、冒頭歌だけでなく、二首とも掲げておく。

天平勝宝二年三月一日の暮に、春の苑の桃李の花を眺矚めて作れる歌二首

春の苑紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ娘子
我が園の李の花か庭に降るはだれのいまだ残りたるかも
（巻十九・四一三九～四一四〇）

天平勝宝二年（七五〇）三月一日の夕べから、三月三日の朝まで、家持は時間を追って八首の歌を詠んでいる。それを一般に「越中秀吟」と呼んでいる。家持は、天平十八年（七四六）越中守に任ぜられ、以後ずっとその任にあった。この八首は、いずれも望郷への思いに触発されることで生まれた幻影と、現在いる越中の鄙の風景との間をたゆたうような表現性をもっている。ここに掲げた二首はその典型であり、とりわけ冒頭の一首は傑作としての評価が高い。以下、この歌の表現のありようを、二首目の歌ともども考えてみたい。

題詞から見ていこう。「春の苑」とあるのは、国守館の庭を指す。その庭に咲く「桃李の花」を眺めて作った歌という。いわゆる属目詠である。だが、桃も李も、もともとは渡来種であり、越中の風土とは異質な植物である。それ以上に、これらは漢詩文の世界の題材でもある。それゆえ、この「桃李」には、非現実の光景を作り出す作用があるともいえる。ここでは、一首目に桃、二首目に李と歌い分けている。

一首目は、桃の花の下に立つ娘子の姿を歌っている。「樹下美人図」の構図を下敷きにしたものという。「樹下美人図」とは、ペルシャやインドに起源をもつ樹下に美人を配する絵画的構図で、中国に伝来、唐代に流行した。わが国では、正倉院の「鳥毛立女図屏風」がよく知られている。

「紅にほふ」は、「桃の花」の「紅」とその下に立つ「娘子」の赤裳（下半身を覆うスカート状の衣）の「紅（ベニバナ染め）」とが映発しあうさまを描いている。ただし、この「娘子」は、桃の花に触発された家持の幻影らしい。なぜなら、「娘子」は唐風の、つまり都会的な装いをこらした華麗な姿で写し出されているからである。この娘子はいわばみやびの象徴であり、ここには家持のつよい望郷の思いが現れている。鄙の風土の中においてこそ、かえってこのみやびな光景が思い描かれることになった、そうした一種の転倒をここに認めるべきかもしれない。

■川藻を採る少女の像

家持は、これと同様な光景をすでに歌っている。天平二十年（七四八）春、家持は、春の出挙の視察業務を兼ねて越中の諸郡を巡行する。そこで詠まれた一連九首の歌が、巻十七に収められている。

礪波郡の雄神河の辺にして作れる歌一首

雄神河紅にほふ少女らし葦附水松の類採ると瀬に立たすらし
（巻十七・四〇二一）

出挙とは、春、種籾用の稲を農民に貸し、秋の収穫時に利息とともに返済させる制度をいう。もともとは貧窮農民救済のための制度であったが、家持の時代には、租税の一部として強制的に割り当てられるようになっていた。それゆえ、その視察も国守の大切な役目の一つとされていた。

家持は、この前年、すなわち越中赴任の翌年の春は、大病に罹患し、生死の境をさまようような状態で、とてもこのような視察業務の任には堪えず、国内をくまなく回るのは、この時が初めてのことだった。それだけに、都とは異なる鄙の風土との出会いは、家持の心にきわめて新鮮な印象をもたらした。

ここに掲げた一首も、その時の歌で、川藻を採る少女の姿が歌われている。「葦附」は川藻の名だが、どうやらこの土地の言葉であるらしく、家持はここに「水松（みる）の類（たぐひ）」という注記を加えている。「葦附」という言葉は、この歌に、鄙の風土性を感じさせる効果をもたらしているといえる。

ところが、この川藻を採る少女の姿は、きわめて文学的に造型されている。「紅にほふ」は、すこぶる詩的な表現であり、そこに浮かび上がる華やかさは、労働する土地の少女の姿とはそぐわない。「紅にほふ」は、少女の赤裳の彩りが川面に照り映えているさまを写し出しているが、こうした表現を生み出す感覚は、都風の美意識にもとづいている。

「赤裳」はもともと、官女の装いだった。そこで、この少女はむしろ家持の幻影、知覚の中に浮かんだ幻影ではないかとする理解も現れることになる。むろん、川藻を採る少女は実在するが、家持はその鄙の少女に重ねて、幻想の少女を見ているのである。その理解が正しければ、この幻想の光景は、「葦附」という鄙ぶりの言葉、その土地の言葉の上に、微妙に重ねられていたことになる。

家持がこの異土の風景に向きあう時、その耳、すなわち聴覚は、その鄙の言葉（「葦附」という音）をそのまま受容しつつも、そのまなざし、すなわち視覚は、実際に目にしている現実の姿を突き抜け、むしろ幻想の光景を脳裏に浮かび上がらせている。その幻想の光景は、都、すなわちみやびの世界への憧れ、望郷の思いに結びついている。異土のもっとも異土らしい部分に触れた時、家持のまなざしはかえってその対極にあるみやびの世界へと向けられ、現実の光景を幻想の光景に作り替えている。ここには、都と鄙の間に分裂した家持の知覚が生み出す、一つの想像の景が写し出されて現れていることになる。

ならば、この歌は「越中秀吟」の冒頭歌と、表現のしくみはほぼ相似形であったことになる。違いがあるとすれば、「葦附」を採る少女は現実に存在するが、「越中秀吟」の「娘子」は幻影の中の存在でしかないことである。なお、この「娘子」を、越中に下向した家持の妻大伴坂上大嬢（おおとものさかのうえのおおおとめ）と見る説もあるが、坂上大嬢の下向の時期は、さらに遅れると見るべきであり、この説は成り立たない（多田一臣『万葉集全解7』、筑摩書房に詳しい）。

■「紅にほふ」―ニとカ

ここで、二首の歌に共通して見える「紅にほふ」の「ニホフ」についていささか記しておきたい。「紅にほふ」が、赤裳が桃や川面に映発するさまの表現であることはすでに述べたとおりだが、問題は「ニホフ」という言葉にある。「ニホフ」とは、対象のもつ霊威が表面に現れたり、受け手の側に作用を及ぼしたりすることを意味する言葉で、嗅覚も含んで全感覚的に用いられる。とはいえ、視覚、すなわち受け手の目に映ずる感覚をまず第一にしていることが重要である。「ニホフ」の「ニ」が、もともと「丹」など赤系統の色を意味する言葉であることからも、それは明らかであろう。一方、この「ニ」と類似する言葉に「カ」（香）がある。この「カ」は嗅覚表現にかかわるが、その「カ」にも対象に内在する霊力・霊質が意識されている。そこで、「ニ」と「カ」の相違になるが、前者がどちらかといえば視覚的であるのに対して、「カ」はより内在的であり、そこから漂い出て受け手の側に浸透するような霊力を意味していた。この微妙な違いは、『源氏物語』宇治十帖の二人の男主人公、薫と匂宮の名にも現れている。どちらもその身体から漂う香りが特徴とされるが、薫の場合は体質によって、芳香がおのずと外部に現れ出るのに対して、匂宮の場合は衣服に薫き染（し）めた香（こう）の香りであるという。ならば、薫の香りはより内在的であり、匂宮の香りはより外在的であったことになる。そこに視覚の問題を重ね合わせれば、「ニ」と「カ」（香）の微妙な差異は、より明らかになる（多田一臣『古代文学の世界像』、岩波書店）。「紅にほふ」の「ニホフ」が、幻想の光景を生み出すことができるのも、対象の霊威が視覚を通じて受感されているからに違いない。

■知覚のまぎれ

最後に「越中秀吟」の二首目の歌についても簡単に触れておく。この二首目も、一首目と類似の表現性をもつ。「はだれ」は地上に残る斑雪（まだらゆき）だが、これも家持の幻影であった可能性がある。中西進氏が述べているように、家持が直接目にしているのは、地上に散り敷かれている李（すもも）の花びらだけなのだろう。それを「はだれ」と知覚するのは、内面の感覚作用にすぎない（中西進『万葉の歌びとたち』、角川書店）。むしろ、夕光の中の知覚のまぎれといってもよい。

以上、この「越中秀吟」の二首は、「葦附」を採る少女の歌をも含めてのことになるが、そこに見られる家持の視線は、鄙にありながら、現実の鄙の風景を遮断し、内面に想像された幻想の光景へと向けられていた。この意味で、これらの歌は、みやびの世界の価値を、家持に改めて自覚させる意味をもっていたということができる。

新人教師のための漢文指導入門講座 中級編⑩

「WEB国語教室」連動

訓読が意味まで表す句法①

―比較・選択の形・仮定の形・詠嘆の形

塚田勝郎（つかだかつろう）
筑波大学附属高等学校教諭

1　三つの句法の共通点

句法の指導もいよいよ最終段階に入りました。ここからは、今まで扱わなかった句法の指導ポイントを確認することとします。まず今回は、比較・選択の形、仮定の形、詠嘆の形の三つを取り上げます。

この三つの句法には、ある共通点があります。たとえば「…よりも」「…に如かず」と訓読できれば、比較・選択の意味であることにすぐに気づきます。同様に、「如し…」「苟くも…」と読めれば、わざわざ仮定の形と確認するまでもないでしょう。「嗚呼…」「…かな」と出てくれば、詠嘆の形であることは一目瞭然です。今回の三つの句法の共通点は、訓読から意味を容易に推測できることです。

まずは、授業プリントをご覧いただきます。

その他の形　1　句法シリーズ#07

(1) 比較・選択の形

■**タイプ1**　「AよりもBのほうがよい」「Aが一番だ」と述べる形。

苛政猛**於**虎。（礼記）
礼**与**其奢也、**寧**倹。（論語）
百聞**不如**一見。（漢書）
莫若六国従親、以擯秦。（十八史略）
未若復吾賦不幸之甚也。（柳宗元「捕蛇者説」）
寧為鶏口、**無**為牛後。（十八史略）

■**タイプ2**　「AとBとでは、どちらが……か」「一番はどれか」と尋ねる形。

創業守成**孰**難。（十八史略）
師与商也、**孰**賢。（論語）
弟子**孰**為好学。（論語）

(2) 仮定の形

■**タイプ1**　文頭に「もし」「かりに」などの意味を表す語を用いる形。

如詩不成、罰依金谷酒数。
（李白「春夜宴桃李園序」）

男児立志出郷関、学**若**無成死不還
（月性「将東遊題壁」）
苟無恒心、放辟邪侈、無不為已。（孟子）
縦彼不言、籍独不愧於心乎。（史記）
今、人乍見孺子将入於井、皆有怵惕惻隠之心。（孟子）

■**タイプ2**　文中に「雖」を用いる形。

其身不正、**雖**令不従。（論語）
回**雖**不敏、請事斯語矣。（論語）
★「雖」の意味のちがいを確認しよう。

■**タイプ3**　文脈から判断して仮定に読む形。

勧君更尽一杯酒、西出陽関無故人
（王維「送元二使安西」）
不憤不啓、不悱不発。（論語）
不一者、若族皆且為所虜。（史記）
不然、籍何以至此。（史記）

使我有洛陽負郭田二頃、豈能佩六国相印乎。（十八史略）

(3) 詠嘆の形

■**タイプ1**　文頭に「ああ」と読む語を置く形。

嗟乎、燕雀安知鴻鵠之志哉。（十八史略）
嗚呼、其真無馬邪、其真不知馬也。
（韓愈「雑説」）
嗟乎、孺子不足与謀。（史記）

■**タイプ2**　文末に「かな」と読む助字を用いる形。

賢**哉**回也。（論語）
唯我与爾有是**夫**。（論語）

■**タイプ3**　反語から転じた形。

吏呼一**何**怒、婦啼一**何**苦（杜甫「石壕吏」）
是**何**楚人之多**也**。（史記）
学而時習之、**不亦**説**乎**。（論語）

2　指導上の留意点

(1) 比較・選択の形

タイプ1は、厳密に言えば比較の形です。指導のポイントを三点あげます。

①「如」と「若」は通用する。

既に何度も触れたことですが、「如」と「若」の読みと意味は、下表のような共通点を持っています。

〈「如」と「若」は双生児〉

如	若
ごとし	
如く（しく）	若く（しく）
如し（もし）	若し（もし）
如く（ゆく）	若（なんぢ）

表中で漢字とひらがなを使い分けたのは、書き下し文対策です。ここでは、頻度の低い「如しくは・若しくは」は省略しています。

②「A如レB」の否定形が「A不レ如レB」である。

「ごとし」と「しかず」は読み方がまったく異なりますから、生徒が気づかないのも無理はありません。丁寧な説明が必要です。

板書例

○「A如レB」を否定すると「A不レ如レB」になる

A如レB　＝AはBに似ている。

A不レ如レB＝AはBに似ていない

→AはBに及ばない。

AよりBのほうがよい。

AよりBのほうが程度が重い。

※混乱してA・Bの優劣がわからなくなったら、「百聞不レ如二一見一。」の例文を思い出そう！

③「A不レ如レB」を解釈する時は、訳語を慎重に選ぶ。

柳宗元の「捕レ蛇者説」の学習で、多くの生徒は「未レ若下復二吾賦一不幸之甚上也。」の文の解釈に苦労します。以前に否定の形の項で触れたように、この「未」は「まだ」の意を含まず、「不」に置き換えることが可能です。したがって、この文も「A不レ如レB」のパターンに当てはめれば、さして苦労することなく解釈できるはずですが、現実はそうではありません。

解釈に悩む生徒は、「AよりBのほうがよい」にそのまま落とし込んで解釈しようとしているようです。このような生徒には、次のような説明が有効です。

板書例

○「未レ若下復二吾賦一不幸之甚上也。」の解釈

この文では、「未」は「不」の意味。

「A不レ如レB」に当てはめて考えればよい。

A＝蛇捕りの不幸

B＝租税の納入をもとの形に戻す不幸

A〈蛇捕りの不幸〉よりもB〈租税の納入をもとの形に戻す不幸〉のほうが程度が重い。

←

B〈租税の納入をもとの形に戻す不幸〉よりもA〈蛇捕りの不幸〉のほうが、まだましだ。

タイプ2は選択の形で、特に「孰」の読み分けが重要です。人と事物で読み分けができればいいのですが、基準は必ずしも明確ではありません。大まかに次の点を示せば、十分でしょう。

〈「孰」の読み分け〉

○人を選択する場合→たれカ（＝誰）・いづレカ

○人以外を選択する場合→いづレカ（＝何）

⑵ 仮定の形

タイプ1で生徒が迷うのは、仮定の語の係る範囲の結び方です。多少の例外はあるものの、次のように整理することができます。ここでも「如」と「若」の関係について、言及しておくとよいでしょう。

板書例

○仮定の語と結びの呼応

もシ　→……バ（……トモ）

いやシクモ→……バ

たとヒ　→……トモ

タイプ2では、二つの例文の「雖」の意味のちがいを確認する必要があります。「其身不正、……。」の「雖」は「……したとしても」という逆接の仮定条件です。これに対して「回雖不敏、……。」の「雖」は「……ではあるけれども」という逆接の確定条件です。

タイプ3は、仮定の意味を表す文字がないだけに、接続助詞の「ば」に接続する文字の訓読が問題になります。

たとえば「西出二陽関一無二故人一」の「出」の読み方は、「出づれば」と「出でなば」のどちらでしょうか。「出づれば」と訓読すると、古典文法を真面目に勉強した生徒は「出たので」と解釈するかもしれません。「出でなば」ならば、完了の助動詞「ぬ」の未然形＋「ば」で、「出てしまったならば」という仮定条件であることは一目瞭然です。

「不レ憤不レ啓、」の「不レ憤」の読み方は、「憤せざれば」でしょうか、それとも「憤せずんば」でしょうか。「憤せざれば」と読むと、「憤しなかったので」という誤解が生じそうです。古文の時間に接続助詞「ば」の接続をしっかり学習している生徒はとまどうかもしれませんが、漢文の訓読では仮定条件を表すのに「未然形＋ば」と「已然形＋ば」のどちらも許容されることを知らせておきましょう。

⑶ 詠嘆の形

タイプ1とタイプ2については、指導に時間をかける必要はないでしょう。

タイプ3では、反語との関係を再確認します。疑問と反語、反語と詠嘆は、見た目の判断が難しいことを実感させたいものです。

次回は、限定・強調の形と抑揚の形を扱った後、句形に関する指導の総まとめをします。

この連載は大修館HP内「WEB国語教室」でも読むことができます。次回は「WEB国語教室」に5月頃アップする予定です。

諏訪原研 著
漢詩から読み解く
西郷隆盛のこころ

四六判・並製・二七二頁
定価＝本体一九〇〇円＋税

明治維新の立役者西郷隆盛は、西南の役に敗れ自刃するまで、四十九年の生涯で二百首近い漢詩を残しているという。

本書は「児孫の為に美田を買はず」の一節で有名な明治四年の「感懐」をはじめ、西郷の代表的な漢詩に解説を加えながらその足跡を辿っている。

折しも「明治百五十年」の節目である。NHKの大河ドラマに西郷が取り上げられたほか、人物像に焦点を当てた評論なども陸続上梓されているようだ。西郷ブームの観がある中で、その詩作に焦点を絞った本書はユニークである。「詩は志の之く所なり」と『毛詩大序』が喝破した通り、西郷の詩は時代の激流に獅子吼するかの激しい情熱や、堅い理想に貫かれている。

そこからは「知行合一」を説いた陽明学の理念も読み取れる。逆に詩が「志」であるなら、西郷の詩風が花鳥風月を愛でる雅趣にあふれていたらどうであったか。その人生はむろん、明治維新の様相すら異なっていたに違いないとの夢想が、本書を閉じると湧いてきた。

評者＝山本秀也

高嶋幸太／関かおる 編著
岩原日有子／内山聖末／川野さちよ／チャン・ティ・ミー 著
初級者の間違いから学ぶ
日本語文法を教えるためのポイント30

A5判・並製・二七二頁
定価＝本体二二〇〇円＋税

本書は日本語学習者の誤用例を元に「なぜ誤用されるのか」、「どのように教えれば理解されるのか」を解説する日本語教師向けの参考書である。

本書で扱う誤用例をひとつ挙げる。「×庭にパーティがあります。」は、もちろん、正しくは「庭でパーティがあります。」だが、その一方で「×庭でプールがあります。」とは言わず、「庭にプールがあります。」と言う。日本語を母語としている人は助詞「に」「で」を無意識に使い分けており、このような間違いはまず起こさないが、学習者から「なぜ間違いなのですか？」と質問されたら説明に窮してしまうかもしれない。

このように日本語母語話者は間違えないが外国語として学習している人々は誤用してしまう事例は少なからずある。本書ではそういった誤用例を三〇取り上げ、ポイントを解説していく。

日本語を外国語として客観的に考えることで、新たな発見が生まれることだろう。日本語教師だけでなく、国語科教員にも参考になることは少なくない。

評者＝内山雅俊

ローラ・インガルス・ワイルダー 著　パメラ・スミス・ヒル 解説・注釈
谷口由美子 訳
大草原のローラ物語
――パイオニア・ガール［解説・注釈つき］

B5変型判・上製・四四二頁
定価＝本体五八〇〇円＋税

表題をみれば、かつてのNHK連続ドラマ「大草原の小さな家」を知る人はすぐに、あのシリーズかと連想できよう。本書は、ドラマの原作シリーズ誕生に至る過程を、もともとの原稿「パイオニア・ガール」（PG）と、それに対する詳細な注釈および解説により明らかにした、特異な形式の書籍の翻訳である。

本書の楽しみ方は多様だ――イントロダクションから目を通せば、あのシリーズがどのような社会背景のもと、またどのような母娘二人の執筆や関与により成立していったのかがわかる。シリーズの愛読者は、「PG」本文を注釈と合わせ読みつつ、作品化の過程を思いやることができる。そして、どのページを開いても、十九世紀後半、開拓期アメリカのさまざまな日常生活の様子が、目に浮かぶ。

全九章に先に言及したイントロや各種資料まで含めた、労苦が偲ばれる丁寧な研究書でありつつ、本文自体は読みやすいノンフィクションでもある、稀な形態の訳書の刊行が実現したことを、心から喜びたい。

評者＝佐藤宗子
千葉大学教授

中島国彦 著
漱石の地図帳
――歩く・見る・読む

5月刊行予定

四六判・並製・二二六頁（予定）
予定価格＝本体一八〇〇円＋税

著者は、昨年開館した漱石山房記念館設立に深く関わった漱石研究の第一人者。『夏目漱石の手紙』『漱石の愛した絵はがき』（いずれも長島裕子との共著）という手紙にまつわる著書もあるが、本書は地理に焦点を当て、漱石作品と東京の地理との深い関係を明らかにする。

東京の地形がいかに凹凸に富んでいるか、山の手に住んでその地形を熟知した漱石がどのように作品に生かしたか、改めて確認できる。漱石没後百年、生誕百五十年を機に発表したエッセイや、これまでにない都バスでめぐる漱石文学ツアーを加え、漱石文学をどう読んでどう楽しむか、新しい視点での読み方が紹介されている。

一日でまわる文学ツアーは、都バスを利用。漱石が五女雛子を送った落合斎場を起点に、新宿区の小滝橋から早稲田、本郷を通って上野公園を結ぶルートに残るゆかりの地を訪ねる。東京の坂と台地を西から東へ横切っていき、漱石もたどった地形を体感することができるだろう。一日乗車券でたっぷり楽しもう。

評者＝土田江都子

平成31年度用 大修館書店 国語教科書のご案内
多様な現場に対応した豊富なラインナップ

分冊シリーズ（あわせて4単位）

古典B 改訂版 古文編・漢文編
（古B339・340）

現代文B 改訂版 上巻・下巻
（現B329・330）

国語総合 改訂版 現代文編・古典編
（国総344・345）

精選シリーズ（4単位）

精選 古典B 改訂版
（古B341）

精選 現代文B 新訂版
（現B331）

精選 国語総合 新訂版
（国総346）

新編シリーズ（4単位）

新編 古典B 改訂版
（古B342）

新編 現代文B 改訂版
（現B332）

新編 国語総合 改訂版
（国総347）

2単位・3単位の選択科目

2単位

古典A 物語選 改訂版
（古A315）

2単位

現代文A 改訂版
（現A308）

3単位

国語表現 改訂版
（国表307）

国語総合 4単位

国語総合 改訂版 現代文編・古典編

国総 344・国総345
A5判
326ページ／238ページ

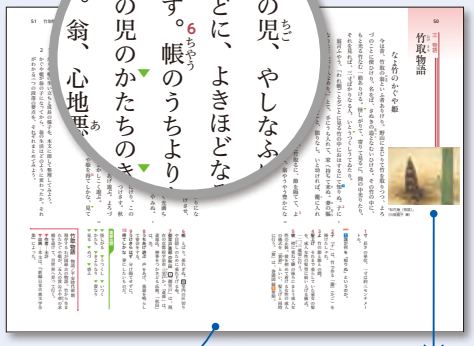
特色1 組み合わせ自在の完全ジャンル別
全体を「評論」「文学」に分け、さらにテーマごとに単元を構成した**完全ジャンル別**。

特色2 主要テーマを押さえ、評論教材を充実
評論単元を2単元増補、**教材数は14本から18本に**。

特色3 評論・小説をより深く理解するコラム
各単元末に、コラム**「評論の視点」「文学の視点」**を計11本設置。

特色4 入試に対応した単元増補
大学入試の傾向も意識し、古文編に**評論単元を増補**。古文編の説話教材、漢文編の文章教材も増補。

特色5 図録・資料の充実
巻頭には**ビジュアルな図録**、巻末には文学史年表や文法事項などの資料をまとめ、機能的な構成に。



●おまえはやって来た（随想）

人間のコミュニケーションの本質とは？
アフリカでの経験から
ある気づきを得る、感動的な随想。

精選 国語総合 新訂版

国総 346
A5判
458ページ

特色1 入試頻出著者、気鋭の論客が多数登場
多様なテーマの**評論教材を10本**収録。巻末**「キーワード解説」**で入試対策も万全。

特色2 読んでおきたい名作小説をもれなく収録
夏目漱石から村上春樹まで、近現代文学の流れを網羅した**名作文学**が勢ぞろい。

特色3 古典の世界にいざなう入門単元
古文編・漢文編の**入門単元を全面リニューアル**。古典との出会いとスムーズな学習をサポート。

特色4 新時代の学力に対応する充実のコラム
論理的思考力をはぐくむ**「思考を深める」**、豊かな表現力を培う**「表現を味わう」**、入試頻出のテーマを押さえつつ読書にいざなう**「広がる読書、広がる世界」**を新設。古文編・漢文編のコラムも全面刷新。

●言語活動「対話から始めよう」

●挑戦

朗読 CD では、
茂木先生ご自身が
本文を朗読！

新編 国語総合 改訂版

国総 347
A5判
408ページ

特色1 生徒の好奇心を刺激する新鮮な教材群
重松清、齋藤孝、川上弘美、福岡伸一、村上春樹など、豪華執筆陣による、新鮮で興味をそそる教材ラインナップ。

特色2 古典のおもしろさをわかりやすく伝える
古典の世界へ誘い込まれるような古典の**入門単元を工夫**。「古典の魅力」（野村萬斎）、「なんてステキな光景なの！」（山口仲美）、「漢文のすすめ」（加藤徹）など、古典の魅力を伝える読み物も充実。

特色3 実践的で役に立つ付録と資料
「原稿用紙の使い方」や**「用字用語一覧」**を新設。**「重要古語一覧」「漢文訓読のまとめ」「古文参考図録」**など資料も充実。

●古典の魅力

古典の価値やおもしろさをやさしく
解説する文章を多数収録。
小説、詩、絵画やマンガへの翻案など、表現活動に役立てることも可能。

●ワンダフル・プラネット！（前見返しより）

現代文B　4単位

現代文B 改訂版 上巻・下巻

現B 329・330
A5判
296ページ／272ページ

特色1 完全ジャンル別、圧倒的な質・量

上・下巻に分かれた**分冊型**の形態と、それぞれが大きく「評論」と「文学」に二分される**完全ジャンル別**の構成。

特色2 入試頻出のテーマを押さえた評論教材

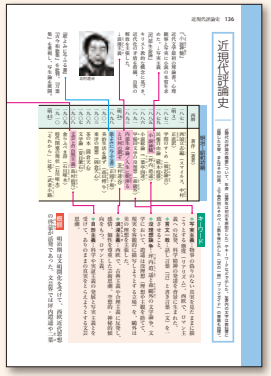
評論教材数を24本から**28本**に増補。下巻には**「近代と文化」**単元を新設。

特色3 教材理解に役立つ言語活動・コラム

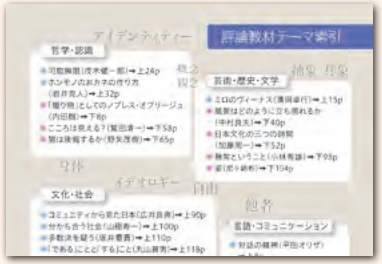
上巻「表現編」では言語活動として**「小論文入門」**を新設。単元テーマの理解に役立ち、重要キーワードも習得できるコラム**「評論の視点」「文学の視点」**を計8本設置。

特色4 学習に役立つ付録などの充実

「近現代評論史」「キーワード解説」を新設。



●近現代評論史



●評論教材テーマ索引

単元テーマの理解に役立つコラムは**「キーワード解説」**とリンク。

●キーワード解説

評論の変遷と**重要キーワード**が一覧できます。

精選 現代文B 新訂版

現B 331
A5判
472ページ

特色1 新しい学力観を見据えた教材化

「学習のポイント」は**「内容の理解」「ことばと表現」「語句と漢字」**の3コーナーに分け、身につく力をより明確に。キーワードは巻末**「キーワード解説」**でも詳しく解説。

特色2 「豊かな言語活動のために」新設

言語活動を行う際に参照するページ**「豊かな言語活動のために」**を新設。

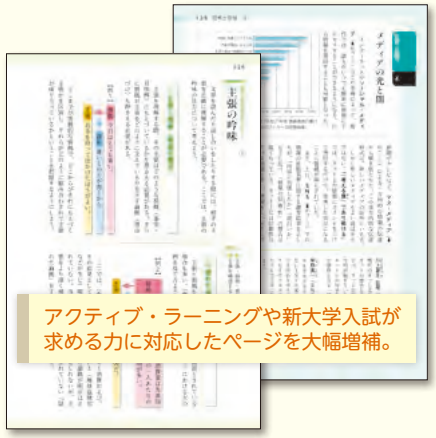
特色3 アクティブ・ラーニングに対応

教材に関連したテーマを掘り下げて解説するコラム**「思考と表現」**を9本新設。思考力・判断力・表現力を高める「課題」を設定。

特色4 教材の再検討・増補

現代を多角的に考えられるような単元テーマを設定。さまざまなテーマ・形態の文章を学習できるよう配慮。

●思考と表現



アクティブ・ラーニングや新大学入試が求める力に対応したページを大幅増補。

●豊かな言語活動のために

●実体の美と状況の美

芸術・比較文化論の決定版。
日本の美意識を「状況の美」という観点から分析。

新編 現代文B 改訂版

現B 332
A5判
342ページ

特色1 高校生の「いま」をとらえた新教材

高校生が直面している問題を扱う**「情報化時代に生きる」**単元を新設。**小川洋子、吉本ばなな、又吉直樹**など、生徒の心に響く新教材を6本収録。

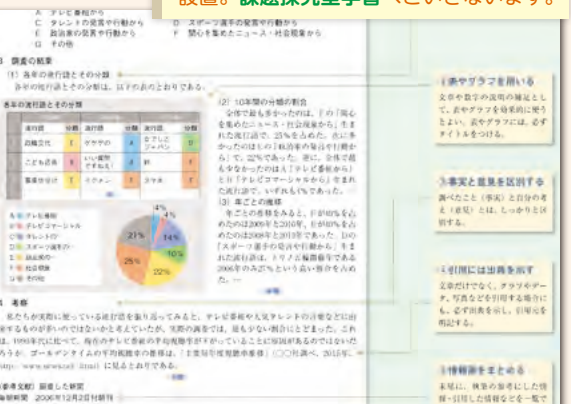
特色2 わかりやすい教材化の工夫

新設の「情報化時代に生きる」単元では、言語活動**「テーマを設定して調べた成果をまとめる」**を設置。

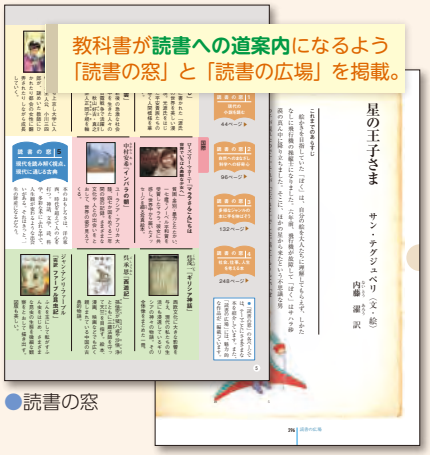
特色3 読書案内の充実

「読書の窓」「読書の広場」をいっそう充実させ、教科書がそのまま読書への道案内になるよう配慮。

新設単元「情報化時代に生きる」では、テーマを決めてレポートを書く活動を設置。**課題探究型学習**へといざないます。



教科書が**読書への道案内**になるよう「読書の窓」と「読書の広場」を掲載。



●読書の窓

●読書の広場

古典B 4単位

古典B 改訂版 古文編・漢文編

古B 339・340
A5判
312ページ／182ページ

特色1 見やすく使いやすく、紙面を一新

紙面デザインを一新。本文には**大きく読みやすい書体**を採用。**見開き単位を意識した紙面構成**で、授業の進行やプリント作成にも配慮。

特色2 生徒の視点に立った教材化

本文理解に役立つ資料を見やすく教材化。脚注は訳語と補足的な情報を**人地補句法のマーク**で区別し、よりわかりやすく。

特色3 理解を深めるコラムを大幅増補

古文の世界を広げるコラム**「古文の窓」**を2本、**「漢文の窓」**を4本増補。読解に必要な知識や方法をまとめたコラム**「古文を読むために」**を2本、**「漢文を読むために」**を3本新設。

特色4 資料類の配置・構成・内容を充実

図録要素は巻頭に、語句・文法要素は巻末に。古文の世界を俯瞰できる資料を新設。

『源氏物語』の「巻名インデックス」、その作品の文学史的位置が概観できる「年代スケール」を新設。

●源氏物語「桐壺（一）」

精選 古典B 改訂版

古B 341
A5判
392ページ

特色1 見やすくわかりやすく、紙面と教材化を一新

明るく読みやすい紙面デザインに一新。『源氏物語』『大鏡』などには、**本文理解に役立つ資料**を見やすい形で教材化。

特色2 古典でもアクティブ・ラーニング

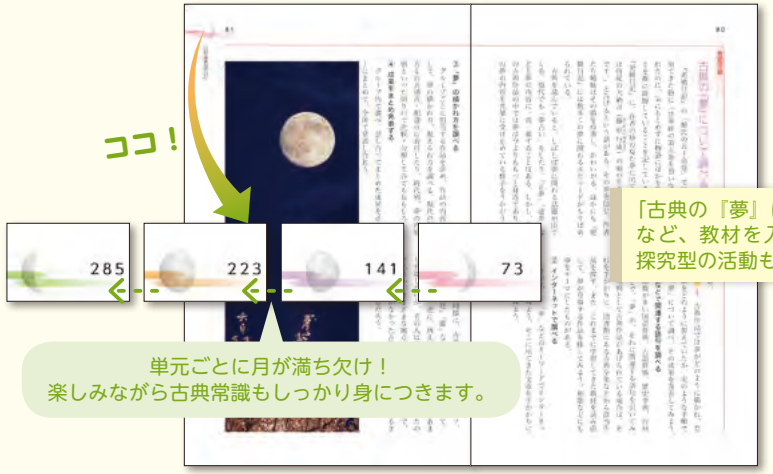
読み比べなど教材に即した言語活動のほかに、「古典の『夢』について調べる」など、教材を入り口にした課題探究型の活動も新設。

特色3 古典への理解を深めるコラムを大幅増補

読み物コラム**「古文／漢文の窓」**、読解に必要な知識や方法をまとめたコラム**「古文／漢文を読むために」**を大幅に増補・新設。

特色4 資料類の配置・構成・内容を充実

巻頭には**「古文の流れ」「主要人物関係図」**など古文の世界を俯瞰できる資料を、付録には実用的な資料を新設。



「古典の『夢』について調べる」など、教材を入り口にした課題探究型の活動も新設！

単元ごとに月が満ち欠け！
楽しみながら古典常識もしっかり身につきます。

●言語活動「古典の『夢』について調べる」

新編 古典B 改訂版

古B 342
A5判
366ページ

特色1 古典の世界を広げる教材と教材化

巻頭教材は新たに**「安倍晴明と百鬼夜行」**を収録。小説・漫画とのコラボレーションで古文の世界に無理なく誘い、さらに言語活動へも発展できる構成。

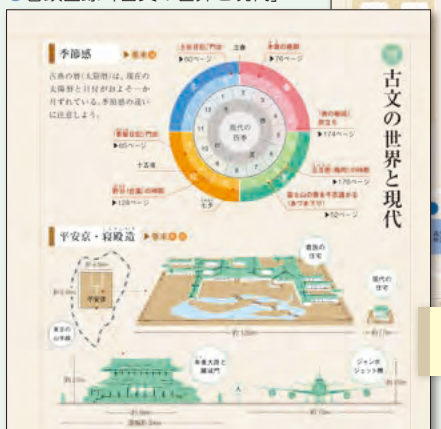
特色2 古典がビジュアルになる「古典への招待」

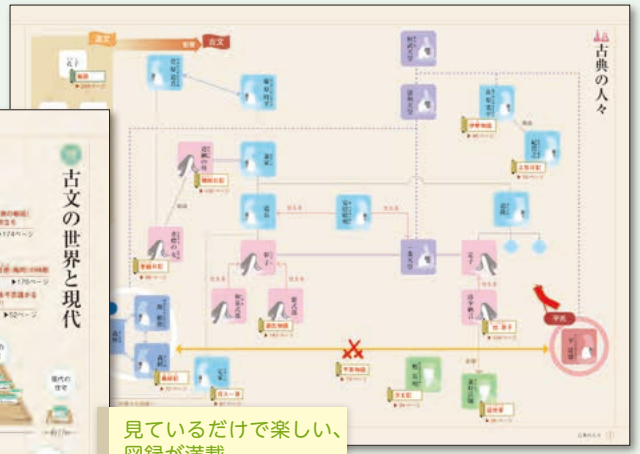
各単元の最初に設けた好評の**「古典への招待」**をさらに増補。漢文編の冒頭単元に、故事成語を入り口にして漢文の世界に誘う**「漢文への招待」**を新設。

特色3 見るだけで楽しい巻頭と巻末図録

巻頭には、**古文の世界を図解**するページを新設。**巻末図録**も、よりビジュアルに刷新。付録**「日本のことわざ・慣用句」「故事成語」**などの資料類も充実。

●巻頭図録「古文の世界と現代」





見ているだけで楽しい、図録が満載

●巻頭図録「古典の人々」

2単位・3単位の選択科目

国語表現 改訂版

3単位

国表 307
B5判
206ページ

特色1 クイズ形式で楽しく言葉の基本を学ぶ

問題を解きながら言葉の基本や単元の内容を学べる**「実践トレーニング」**を新設し、学習した内容＋αをゲーム感覚で復習。

特色2 データ型小論文も登場！

小論文の書き方を基本から丁寧に解説。新設の**「レッスン4　統計資料を読み取って書く」**で、入試頻出のデータ型小論文を解説。

特色3 アクティブ・ラーニングにも対応

第6単元**「会話・議論・発表」**を強化。巻末資料**「話し合いのいろいろ」**を新設し、「シンク・ペア・シェア」「ワールドカフェ」など、協働学習の手法も解説。

特色4 学習意欲を高める読み物・資料の充実

学習の参考や活動の動機づけとなる文章・資料を集めた**「表現への扉」**に、敬語や手紙に関わる読み物を新掲載。

現代文A 改訂版

2単位

現A 308
A5判
264ページ

特色1 「随想・評論」「小説・詩歌」のテーマ別

教材は**ジャンル別**に2部に分け、さらにテーマごとに分類して構成。評論・小説以外に、「詩・短歌・俳句」も収録。現場の実情に合った教材選択が可能。

特色2 言語文化への理解を深める教材・コラム

我が国の**言語文化**の特質や、外国の文化との関係について学べる教材を豊富に収録。通知文や法律などの**実用的な文章**や、身近な話題をとおして言語文化について考えるコラム**「言語文化の窓」**も掲載。

特色3 単元扉・教材・コラムで深まる学び

各単元のはじめに**読書案内**を掲載。単元末の「言語文化の窓」とあわせて、入門から発展まで、スムーズに言語文化への理解を深められる。

古典A 物語選 改訂版

2単位

古A 315
A5判
278ページ

特色1 ジャンル別構成で必要十分な教材を精選

物語作品を中心に、古典学習に必要十分な基本的な教材を精選。単元構成は**ジャンル別**とし、各学校の実情に応じて教科書活用の幅を広げられる。

特色2 「つながり」を可視化する工夫が満載

古典に対する理解を深め、その深さとおもしろさを実感するために、年表・系図などの図解や**「関連」「展開」**コーナーを設置。古典世界のさまざまな**「つながり」**を把握するための工夫を盛り込んだ。

特色3 ビジュアルで楽しい充実の資料・図録

古典学習に欠かせない**資料・図録**は、見やすさと親しみやすさを追求。巻頭には、身近なものと見比べることで古典の世界がリアルに体感できる特集ページ**「古典と現代」**を新設。